

にちぎん

2019 NO.59

秋



インタビュー 扉を開く

木村泰子 大阪市立大空小学校 初代校長

すべての子の学習権を保障する「みんなの学校」を率いた校長の挑戦

地域の底力

岩手県久慈市

苦難を乗り越え地道な努力を重ねながら未来を切り拓く岩手県久慈市

対談 守・破・創

佐藤忠男 映画評論家・日本映画大学名誉学長

原田 泰 日本銀行政策委員会 審議委員

知られざる映画に光を当て「批評の力」で世界へ伝える

エッセイ “おかね” を語る

阿刀田 高 作家 金利を二倍にしたかったら

私の妻の父親は長く実業界にあつて経済についても、そこそこ明るい人であつた。

ある日、ある時、どうしてそんなことが話題になつたのか覚えていないけれど、茶の間で、

「金利を二倍にしたかつたら……」

と呟く。私はこの方面の知識にうとく、義父ならばなにかすばらしい知恵があるのかも、しれないと、さりげなく、

「はい？」

と聞き耳を立てていると、義父はひとくち茶をすすり、

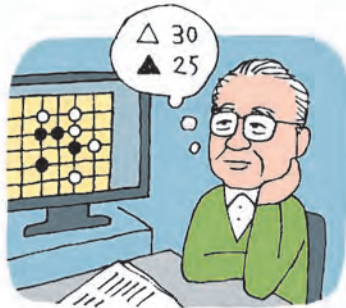
「元金を二倍にすればいい」

なーんだ、そんなこと、当たり前だろ、と思つたが、しばらくたつて、

——なるほど、これが本当なんだ——

と悟つた。銀行その他の金融機関が、ほぼ一定の金利で（配当なども同じだが）ビジネスを進めている。それが世の中の水準であり、それを超えて利益を得ようとすれば、どこかに無理がある。ひどければ詐欺や犯罪のおそれさえある。「配当が二倍になりますよ」なんて、おいしい話には気をつけねばならない。義父の言葉は身に染みた。

元来、私はケインズより二宮金次郎に与するたちなので……不確かな知識で申しわけないけれど、消費が経済を活性化するより、ま



絵・江口修平

金利を二倍にしたかつたら

阿刀田 高

ず貯蓄だね」と考えるたちだから、義父の教えに従いやすかつた。それなりに消費を抑えて老齢となり、過日、老後資金に関して話題になつた二〇〇〇万円くらいはお金を残しているが、これは目下投資信託に委ね、毎朝、見るともなしに経済新聞のオープン基準価格欄を瞥見している。わずかなお金を委ねているだけだが、それでもその日その日で値上がりや値下がりがある。

私の委ねた銘柄に黒い三角が記されて値下がりにしている日は、もちろんつらい。

——えっ！二〇万円も損しているのか——

今日一日こつこつ原稿を書いて収入を得る努力がばからしくなる。逆に白い三角がついて値上がりしている日には、

——おお、二五万円もうかつたのか——

うれしいけれど、これもやっぱり、

——これだけ得したんだから、仕事、やめておくかな——

原稿料で二五万円得るのは楽ではない。つい、つい怠けて朝からテレビの囲碁番組を見入つたりしてしまう。

お金はとても大切です。元金を増やせばいいんだ、と思ひながら実行はそれほど熱心ではなく、さほどの実績もない。

でも、ま、いいか。

あとうだ・たかし●作家。1935年、東京生まれ。早稲田大学文学部卒。国立国会図書館に勤務しながら執筆活動を続け、78年『冷蔵庫より愛をこめて』でデビュー。79年『来訪者』で日本推理作家協会賞、同年、短編集『ナポレオン狂』で直木賞。95年『新トロイア物語』で吉川英治文学賞。著書は多数。日本ペンクラブ会長、文化庁文化審議会会長、山梨県立図書館長などを歴任。2018年、文化功労者。





2 エッセイ／“おかね”を語る
金利を二倍にしたかったら 作家 阿刀田 高

4 インタビュー／扉を開く
木村泰子 大阪市立大空小学校 初代校長
すべての子の学習権を保障する「みんなの学校」を率いた校長の挑戦



9 地域の底力——岩手県久慈市
苦難を乗り越え地道な努力を重ねながら
未来を切り拓く岩手県久慈市



16 対談／守・破・創
佐藤忠男 映画評論家・日本映画大学名誉学長
原田 泰 日本銀行政策委員会 審議委員
知られざる映画に光を当て「批評の力」で世界へ伝える

21 FOCUS → BOJ 29 日本銀行国際局 国際連携課の仕事
日本初開催のG20を総力をあげてサポート

日本銀行のレポートから

26 「経済・物価情勢の展望」(展望レポート) — 2019年7月—

28 「地域経済報告」(さくらレポート) — 2019年7月—

別冊「インバウンドの現状：

企業等の取り組みと地域活性化の注目点」— 2019年6月—



36 トピックス
福島支店は開設120周年を迎えました ほか

39 AIR MAIL from London
イギリスの底力—日本文化受容の「広がり」と「深さ」

表紙のことば

日本銀行松本支店は、大正三年（一九一四）に日本銀行一〇番目の支店として、長野県松本市本町三丁目開設されました。

支店設置場所の選定にあたっては長野市も候補に挙がりましたが、当時、長野県だけでなく山梨県も管轄するために、これら中心部に位置し関東や関西とのアクセスが良好であったことや、わが国の重要な産業のひとつであった製糸業の集積地に近かったことから、松本市が選ばれました（現在は長野県のみ管轄）。

初代店舗は、当時としては斬新な洋館で、近代の学校建築で初めての国宝指定となる旧開智学校と並び称されるスマートな建築でした。

表紙の現店舗は、初代店舗の老朽化に伴い、昭和三十三年（一九五八）に松本市丸の内三丁目新築移転したものです。堀をひとつ隔てて国宝松本城があり、その漆黒とあてやかなコントラストを見せています。現店舗竣工から六〇年以上にわたって、松本支店は松本の街を見守り続けています。



表紙・画 北村公司



大阪市立大空小学校 初代校長

木村泰子

Yasuko Kimura

障がいのある子もいない子も、みんなが同じ教室で学び、互いに刺激を受けながら成長していく。そんな理想を実現した「奇跡の学校」、大阪市立大空小学校。大空小学校の日常は、ドキュメンタリー映画『みんなの学校』として公開され、四年たった今でも全国各地で上映され続けている。その大空小学校初代校長として、理想の実現に奔走した木村泰子さん。木村さんは「大空小学校でできたことはどこでもできる」と事もなげに語る。学校とは？ 学びとは？ 学力とは？ 木村さんへのインタビューは、教育の基本をあらためて考えさせるものとなった。

すべての子の学習権を保障する 「みんなの学校」を率いた校長の挑戦

障がいがある子も、そうでない子も、 一緒に教室で学ぶ

—— 木村先生が教員になられた一九七〇年当時、私は小学生でした。その頃の先生は「怖い」存在でした。

木村 七〇年代の多くの小学校では、どれだけ多くの知識を効率よく生徒に教えていくかで先生の良し悪しをはかる風潮がありました。先生はただ「正解」を教える、生徒も親も物申せない存在でした。逆に、先生がそうした教育をするのに差し障りのある子、例えば重度の障がいのある子は、通常の学校にいなかったはず。それは「いなかった」のではなく、障がい

のある子どもが学校でみんなと同じように学ぶ「当たり前がなかった」んです。そうした障がいのある子に平等に教育の機会が保障されるようになったのは、昭和の終わり頃。平成に入ると、それが「特別支援教育」に変わっていきます。

—— 最近ようやく、障がいのある子も、そうでない子も共に学ぶ「インクルーシブ教育」という考え方が広がってきました。

木村 日本でようやく特別支援教育が始まった頃、世界ではすでに新たな理念であるインクルーシブ教育が提唱されていた

んです。日本政府はユネスコ(国連教育科学文化機関)に、インクルーシブ教育を進めると約束しているのですが、現状は「学校に特別支援学級がやっとできた」程度です。でも、特別支援教育が導入されても結局、障がいを理由に、みんなと一緒に学ぶ機会をつくることができていない。障がいの有無にかかわらず、みんなが一緒に学ぶことの大切さは理解されているはずですが、実際は「特別なケアが必要だから」という名目で障がいのある子とない子を分け隔てしてしまっているのです。

—— 大空小学校では、特別支援教育の対象となる子も、そうでない子と同じ教室で学びます。木村先生が初代校長に就任され

るにあたって、当初からインクルーシブという考え方を現場で実践しなければという思いがあったんでしょうか。

木村 そもそもインクルーシブという言葉すら知りませんでしたし、開校から九年間校長を務めました。インクルーシブという言葉を使ったことすらありません。周りの皆さんが大空小学校の教育をそういう言葉で伝えてくださったただけなんです。大空小学校は理想の学校とか奇跡の学校と言われますが、本当に普通の小学校です。

—— 木村先生が校長を務められた大空小学校は、大規模な小学校が分かれてきた学校ととか。木村 元々一〇〇人以上の生徒がいるマンモス校があったの

ですが、生徒数が増えて教室が足りなくなりました。それに対応するために新設された学校が大空小学校でした。ただ、当時、住民の地域へのこだわりや区割りの関係などで二〇年以上ももめて、大空小学校はやっと開校したんです。その過程では、大人たちが自分の嫌なもの、困るものを排除する空気がまん延していました。この空気は、まさに大空小学校を開校するまでの間、大人たちが持ち続けていたものだと思っただけです。地域や人を「くくり」で決めつけて見ていたように感じました。そういう態度を大人が見せていたら、それが子どもに伝わり、学校も、ひいては地域も衰退すると思われました。そこで、学校関係者や地域の偉い方が集まる会で、「皆さんが良い地域に暮らしたいと思うなら、この大空小学校を良い学校にしましょう」と、もつと偉そうに言いました(笑)。

——新しくできた学校に赴任する校長先生としては、非常に勇気のいる行動ですね。

木村 校長の責任はただ一つ、「学校のすべての子どもたちの学習権を保障すること」です。その責任を果たすためにはどうしても必要なことだったんです。重い障がいがあるうと、家庭が貧困であろうと、つい友だちに暴力を振るってしまう子であろう

学校は「みんな」が主体的につくるもの

——うらや紆余曲折を経て、大空小学校が開校したのは二〇〇六年です。

木村 新しい学校ができることに反対の声もお根強い、完全アウェーでのスタートです。「絶対に良い学校にしよう」と教職員誰もが意欲をかき立てました。

子どもたちは全校で一八〇人ほど。大空の校区外からも、学校に自分の居場所がないという子たちが大勢来たんです。

その中に、一年生の時の最初の二週間しか学校に通っていないという、当時小学六年生の子がいました。六年生まで学校に行けなかった子どもです。この

と、みんな地域の宝です。どんな子も学校では学習権が保障され、その子らしく過ごすことができなければなりません。これはそもそも憲法で定められていることです。特別なことを言っているわけではありません。

子は広汎性発達障害(注)で強いこだわりがあり、食事は白いごはんしか食べられませんでした。小学校に入学して二週間後に始まった給食で出されたキウウリが、どうしても食べられませんでした。でも担任から食べるよう指導され、結局、食えずに帰宅。

先生の指導におびえるようになり、次の日から学校に行けなくなりました。その後、この子はPTSD(心的外傷後ストレス障害)と診断されました。

大空小学校が今のような学校になれたのは、この子がいてくれたからだ、私は思っています。これほど困っている子が安心して学校にいられるようにす

るにはどうしたらいいか。それを原点に、全教職員がチームとなって出発できたからです。

——障がいがある子とそうでない子が同じ教室で学ぶことの意義を、もう少し詳しくお聞かせください。

木村 障がいを、病気のように、治療すべきもの、切除すべきネガティブなものであるかのように捉える向きがありますが、障がいは治すものではありません。その子の特性であり、個性なんです。そういう個性を持った子と周りの子どもたちが対等に学び合う場が学校です。障がいのあるなしにかかわらずみんな一緒に学ぶというのは、障がいがない子が、障がいがある子のために我慢するという構図ではありません。いつも一緒が当たり前という空気が浸透してくれば、障がいがない子たちが、どうしたら障がいがある子とやっていけるかを自分たちで考えるようになるんです。これは、

(注) 広汎性発達障害/コミュニケーション能力や社会性に関連する脳の領域に関係する発達障害の総称。



きむら・やすこ ● 1950年大阪生まれ。武庫川学院女子短期大学（現・武庫川女子大学短期大学部）教育学部卒業。70年小学校教員に。大阪市立高松小学校、墨江小学校などを経て、2006年から15年まで新設の大阪市立大空小学校校長を務める。すべての子どもを多方面から見つめ、全教職員のチーム力で「すべての子どもの学習権を保障する学校をつくる」ことに情熱を注いだ。15年に定年退職後は、全国各地で講演活動や教育研修を行う。著書に『みんなの学校』が教えてくれたこと（小学館）などがある。大空小学校の取り組みを描いたドキュメンタリー映画『みんなの学校』は15年に劇場公開され、各地で上映が続いている。映画の公開に先立ち放送されたテレビ版『みんなの学校』は13年度文化庁芸術祭大賞を受賞した。

何物にも代えがたい、子ども同士の大切な学びです。大空小学校はこうした学びを最上位の目的に置いていました。

——障がいがない子たちが、障がいがある子から学ぶ。

木村 そうです。大空小学校を巣立って、大学生や社会人になった子たちに会うと、「大空小学校でいるんなやつと一緒に学んだおかげで、自分たちがものすごく得をしている」と言います。自分の思い通りにいかない人たちと接する際、避けたりせ

ず、どうやったら良好なコミュニケーションを取れるかを考える癖がついているんです。こうした力は点数化できる「見える学力」ではありません。「見えない学力」として社会に出てから生きて働く力なんです。この「見えない学力」を、学校でどうやって伸ばしていくかが問われるのだと思います。

——新しい学校をつくり上げていくにあたり、実際に生徒と接する教職員の方々には、何を伝えたいのでしょうか。

木村 私が最初に教職員の全員

に伝えたことは、「すべての子が安心して学べるように、学習権の保障を大空小学校における最も上位の目的に掲げる」ことです。この目的に反対できる人は誰一人いませんよ。そして、目的を達成するための手段は問わないということも併せて伝えました。手段はみんな考え、つくり上げようと。教員だけでなく、給食調理員や事務職員などすべての教職員で考えました。でも誰からも案が出てこないんです。その負担や責任が全部自分に降り掛かってくるんじゃないかと思つたのかもしれない。

そこで、子どもの学習権の保障を脅かす悪しき習慣を挙げることにしました。そうしたら、出るわ出るわ（笑）。みんな山のように挙げてくれました。——そうした悪しき習慣のない学校にしよう。

木村 断ち切っていったんです。過去をベースに改革することは難しい。うまくいかない、過去にしか戻るところがないか

らです。でもゼロベースでつくれば、失敗しても戻るところがないので、自分たちで考えながらつくり直すしかない。

子どもは、学校があるから学校に行く——これは過去の考え方です。学校はそこにあるものではなく、つくるものなんです。誰がつくるか。学びの主体である子どもが、自分たちが学ぶ学校をつくる。保護者が、自分の子が学ぶ学校をつくる。地域住民が、地域の宝である子どもたちが学ぶ学校をつくる。教職員が、自分が働く学校をつくる。こうした主体的で、当事者意識を持った「自分」たちが集まり、試行錯誤しながら「みんなの学校」をつくっていくんです。

——大空小学校に校則はなく、子どもたちは「自分がされて嫌なことは人にしない、言わない」という約束が一つあるだけだから。

木村 すべての子どもの学習権を保障できる校則は考えられませんでした。校則に子どもをばめ込もうとする。破ると罰則がある。でも、人は約束を破って



公立小だからこそ、 どんな実践もできる

——保護者の方や地域の方には、どのように向き合ったのでしょうか。

木村 私が校長になってから、

しまうものです。実際、子どもたちは約束を破るんです。人を傷つけたり、不快な思いにさせたり、学校の中で毎日経験します。そのときは「やり直し」をする。約束を破ると、子どもは校長室にやり直しに来ます。心底納得していないと、またやり直し。自分のためにやり直しが

できたかどうか、大事な分かれ目です。子どもたちは案外正直に「やり直し」をするんです。子どもが主体的にやり直しをするのは、学校の中に怒号も力による強制もないからです。失敗してもやり直しができますし、大人が「いつでもここにいますよ」と待っているからだと思います。

月に一回、スクールレターを地域の回覧板で流してもらいました。

原稿はすべて校長の私が書きまします。良いことは一つも書きません。困っていること、うまくいっていないことをどんどん発信しました。今、しんどい子がいっぱいいるんです……。回覧板ですから、保護者はもちろんですが、その地域の人も読みます。そうすると、読んだ方が、ひとり、またひとりと学校に来て子どもたちを見てくれるようになり、その輪が広がっていきましました。大事なのは教職員と保

護者、地域住民で「一緒に」子どもを育てること。いつでも学校に来てください。困っている子がいたら寄り添ってください。と。学校はいつもオープンです。

私は大空小学校の入学式で、保護者の皆さんに毎年、同じ話をしていました。「学校には自分のお子さんのほかにたくさんの子がいます。皆さんは、今日から大空小学校の子どもたちの『サポーター』に変わっていただきます」と。

——学校では自分の子ども以外にも目を向けて欲しいと。

木村 そうです。「自分の子を育てたかったら、自分の子の周りの子を育てに学校に行こう」という合言葉もできたんです。自分の子がいじめられていたら、いじめている子に寄り添う。その子に信頼されたら、なせいじめたかを語り始める。他人事が自分事になっていくんですね。これも大きな学びです。

——公立の小学校は、私立に比べて何かと制約が多いように思えます。こうした取り組みがよかったです、という声はありませ

んか。

木村 テレビや映画で大空小学校のドキュメンタリーが流れて以来、それがいちばん多い感想ですね。そのたびに、「公立」の意味が誤解されていると感じます。校風があり方針が決まられている私立とは違って、税金で賄われている公立の学校というのは、「すべての人たちのもの」でしょう。その目的を達成するためであれば、本来、どんな実践も可能なはずです。みんなの学校だからです。

ただ現実には、さまざまなしがらみがあります。その時に、「学校は誰のためにあるのか」という原点に立ち返ること。すべての子どもが安心して学べる学校をつくる——その目的のためにはいかなる手も尽くす、という覚悟があるかどうかが大事です。その覚悟さえあれば、大空小学校でできたことは、全国どこでもできると確信しています。

——本日は興味深いお話をありがとうございました。

（聞き手／情報サービス局長 中川忍）



地域の底力——岩手県久慈市

苦難を乗り越え 地道な努力を重ねながら 未来を切り拓く岩手県久慈市

何もないと思っていた自分たちの住むまちに、
都会では見ることのできない宝物がある。
東日本大震災や大規模な水害を経た今、
岩手県久慈市はあらためて地元の魅力を発見し、
不屈の精神で前進をはかる。



取材・文 山内史子
写真 野瀬勝一

久慈駅と大船渡市盛駅を結ぶ、第三セクター三陸鉄道の「リアス線」。2011年の東日本大震災で大きな被害を受けたが、2014年に全線復旧。2019年3月には、JR東日本管轄となっていた宮古駅～釜石駅間の経営が移管され、新たなスタートをきった。



三陸復興国立公園小袖海岸の奇岩「つりがね洞」。かつて洞穴に、釣り鐘のような形の岩がぶらさがっていたことから名付けられた。

久慈の人々に自信を与えた「あまちゃん」の放送

岩手県北東部、人口約三万五〇〇〇人の久慈市は太平洋に面し、約八五%を森林が占める。そのため、美しい海岸が続く三陸復興国立公園や、日本一ともいわれる白樺林が広がる久慈平庭県立自然公園といった豊かな自然資産に恵まれている。二〇一一年の東日本大震災では、市内約九〇〇軒が全半壊するなど大きな被害を受けた。それに追い打ちをかけるように、二〇一六年には台風の影響により、市街地を含めた広

い地域が水害にみまわれた。しかし、二〇一九年三月には、JR東日本管轄となっていた宮古駅（釜石駅間が復旧し、復興の象徴の一つ「三陸鉄道」に経営移管。「三陸鉄道リアス線」（久慈駅〜盛駅）として全線開通し、新たなスタートをきった。こうしたインフラが回復し、日常の生活は確実に戻りつつあると話すのは、久慈市で生まれ育ったという市長の遠藤謙一氏だ。「私が子どもの頃、久慈にはお店もたくさんあってにぎわっていたんです。ただ少子高齢化の波もあって徐々にそのにぎわいが失われて

「財政が非常に厳しいため、市民すべての声に行政が応えることは難しい。まちを元気にするために何が出来るか一緒に考え、進めていきたいと思います」と話す市長の遠藤謙一氏。



いきました。そこに東日本大震災、台風による水害。これは久慈市にとって本当につらい経験でした」全国各地の例にもれず、人口減少・高齢化への対応は大きな課題のひとつだと遠藤氏は言う。

このため、久慈で多くの求人があるにもかかわらず、知らない方が多い。地元企業の魅力と人手不足の現状を、子どもたちに知って欲しいと思いました」

「少子高齢化と人口の減少というこの大きな流れは、一自治体の力では到底止められません。そうした状況を前提にしつつも、若い世代が久慈で仕事に就き、家庭を持って子育てができるようにする。人口減少による地域への影響をなるべく減らすために、今やれることをやっていきたい」

企業側も学校へ出向いて説明するなどの努力が重ねられた結果、三割未満だった高卒の地元就職率は五割まで高まったという。

対策として遠藤氏が打ち出したのが、中学生、高校生たちに地元企業に就職したいという意識をもってもらったための取り組みだ。「地元で仕事がなく出稼ぎが当たり前だった時代が長かったんです。

「高校の先生方も意識が変わり、積極的に地元就職を勧めていただいています。最終的には七割まで上げていきたいですね。また、これまで大卒者の採用を想定していなかった企業には、将来を見据え、会社の幹部候補としての求人を考えて欲しいと話しています」

久慈市南西部に広がる久慈平庭県立自然公園は約三一万本の白樺林が約四・五キロにわたって続き、林間をぬってのウォーキングやスノーシュートレッキングが行われる。



久慈といえは多くの方が思い出すのは、二〇一三年に放送されたNHK連続テレビ小説「あまちゃん」だろう。年間五〇万〜八〇万人だった

久慈といえは多くの方が思い出すのは、二〇一三年に放送されたNHK連続テレビ小説「あまちゃん」だろう。年間五〇万〜八〇万人だった



三陸鉄道リアス線は通学する生徒たちを含め、久慈市民にとって欠かせない足。三陸鉄道久慈駅は、「あまちゃん」の北三陸駅のロケに使われた。駅構内で販売されている1日20食限定の「ウニ弁当」もまた、ドラマに登場して観光客の注目の的。



観光客は、放送時には約一―三万人を数えた。その後、東南アジア等一〇カ国以上においても放映されたことから、今でも台湾ほか海外から多くのファンが訪れるという。その影響は交流人口だけではないと、遠藤氏の顔がほころぶ。

「久慈は遠い、寒い、何にもないというのが、地元のお年寄りの口癖だったんです。それが『あまちゃん』をきっかけに、久慈に来てくださった方から『こんなにいいまちはない』と言われて自分たちのまちに自信を持ち、前向きに思う人が増えまし

観光客がエールを送る 歴史ある海女の活動

た。まちに人を呼ぶには、まず住んでいる人がまちを誇らしく思うことが大事。久慈への誇りを持つ人が増えたのは、経済的な効果以上に大きなことだったと思っています」

「あまちゃん」で一躍脚光を浴びた久慈の観光資源が、明治初頭から続く北限の海女だ。現役の海女である中川やえ子氏、欠畑かけはたきわ子氏によれば、最盛期には一〇〇人以上の海女がいたものの、現在は一〇―二〇人程度だという。

拠点となる小袖海女センターは、震災後の二〇一五年春に復旧された建物。以前の海女センターは二〇一〇年に新築してから約七



2014年にオープンした「あまちゃんハウス」では、ドラマの衣装やジオラマなどの小道具を展示。全国からファンが訪れる“聖地”のひとつになっている。

カ月後に基礎部分だけを残して津波に流され、海に潜る際の衣装や展示していた昔の道具類など貴重な品々も失われた。そのため、震災後に行われた海女の総会では、活動休止の声もあがったと中川氏は話す。

「二度活動をやめてしまうと、状況が変わって再開となっても、手をあげる人はいなくなり、途絶えてしまうと思っただけです」

観光客の声にも後押しされ、自らが率先してふたたび海に潜ったときの記憶を中川氏は振り返る。

「津波のことが胸にあり、何が起るかわからないという怖さから、最初の一步がなかなか踏み出せなかった。震災後の海はすっかり変わり果て、海に入ったあとは、手ぬぐいも足袋も顔もへドロで

真っ黒になりました」

欠畑氏が続ける。

「最初に入った中川さんたちの勇気には頭が下がります。私が震災後に初めて潜ったときも、同じように怖さを覚えました。海のながさがシーンとしている感じです。以前は海藻やウニでにぎやかだったのが、何もない。地形もすっかり変わっていました」

その後、周囲の支援を受けて体制が整えられ、「あまちゃん」効果により観光客は一気に増えた。昼食を食べる暇もなかったと語りながら、中川氏は笑顔になった。

「私たちが海に潜るのを見て、拍手や応援してくれる気持ちがあったかったですね。見に来てくださる方がいたからこそ今の自分たちがあるんです」

「久慈地下水族科学館もぐらびあ」は、地下石油備蓄基地の作業用トンネルを活用した日本初の地下水族館。北限の海女の素潜りや、潜水服を着る「南部もぐり」のショーが水中で行われる。



小袖海岸では、地元でとれた新鮮なホタテの貝焼きも観光客の人気を集めている。



上／北限の海女として海に潜る、中川やえ子氏(左)と欠畑さわ子氏。素潜りの実演が行われるのは、毎年7～9月。下／2015年に再建された「小袖海女センター」。海女の歴史等の展示コーナーに加え、特産品を販売するショップや、生ウニ井などが食べられる喫茶スペースもある。



欠畑氏も冗談めかして語る。

「芸能人の気分がわかりましたよ。海面に上がったときの声援で、元気をもらいました。お客さまの喜びが、自分たちの喜びになったんです。これはかけがえのない経験でした」

後継者不足の問題を抱えるなか、二〇一八年には久しぶりに地元が、二〇一八年には久しぶりに元若手が海女デビューしたという明るい話題にもうれしさがこみあげた。

縫製業を支える 久慈の人々の堅実な気質

久慈を含む北岩手の主要産業の代表格が、縫製業。そのひとつ、高級婦人服を手がける「岩手モリ

ヤ」はもともと東京の企業だったが、一九七四年に久慈工場を設けた後、一九八八年に現地法人化する。社名の「岩手」には

地元根付きたいとの思いを込めたと話すのは、代表取締役社長の森奥信孝氏だ。設立を決めた大きな理由は、久慈の人の気質だという。

「東京では住み込みで働く東北出身の女性社員が多かったのですが、なかでも久慈の人たちは優秀でした。何事に対しても真面目で、責任感が強く、作業は緻密。とはいえ、技術を積んでも、多くの人は結婚などで地元に戻り辞めていく。これはもったいないと思っていました」

久慈で順調に業績を上げていた

ものの、震災により困難にみまわれた。森奥氏や社員はしばらく避難所生活を強いられたが、幸いにして全員無事。工場も津波が玄関先まで浸水を逃れて一週間で操業を再開したにもかかわらず、全国的な買い控えの影響で受注が激減した。その頃について、森奥氏はこう振り返る。

「この逆境をなんとか将来につなげるようにしたいと考え、一カ月以上仕事がない分、雇用調整助成金(注1)を活用し、社員の教育訓練を行い技術向上を図りました。また、水や電気が止まった経験から、省エネルギーの徹底にも取り組みました。水道光熱費は全社員一丸となり震災前に比べ五二%削減することができました」

日本の縫製業界が現在、海外での安価な生産におさされて苦戦する一方で、岩手モリヤの取引先は名だたるブランドばかり。信頼の理由は、確かな技術力だ。

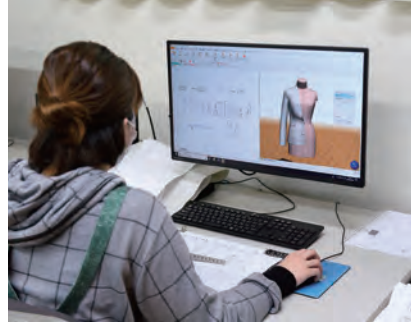


岩手モリヤ代表取締役社長の森奥信孝氏は一般社団法人北いわてアパレル産業振興会の代表理事も務め、学生によるファッションショーを支援するなど、未来の人材育成にも力を注ぐ。

(注1)雇用調整助成金／景気の変動などで事業縮小等を余儀なくされた事業主に対し、従業員を解雇せず、一時的に休業させたり、教育訓練を受けさせたりした場合などに国が休業手当や賃金などの一部を助成する制度。

「発注元からの縫製依頼書をそのまま反映するのではなく、縫製やアイロンがけなどの工程で独自の工夫を加えて立体感を出し、より付加価値を高めて仕上げるんです。生産性は下がるものの、他社との差別化が図れます。メイド・イン・ジャパンとして誇れる商品です」

約一〇〇名の従業員のほとんどが地元採用で、九割が女性。賃金はおさえられても三年で帰国してしまう外国人研修生や実習生には頼らない。



岩手モリヤの工場では、服のパターン作成のための3D CAD（立体的な形状を作っていく支援ツール）から縫製機器まで最新技術を導入し、作業の効率化と安定した品質確保を目指す。



「久慈の人であれば、結婚、出産、子育てをしながらでも、末永く働いてもらえます。技術者を育てる必要がある製造業の場合は、それが大きなメリットです。高品質な商品を生む、まさしく『人材』なんです」

健やかに育つ短角牛の 美味なる魅力を 広めるために

久慈の第一次産業では、農業漁業に加え、畜産業が昔から盛んに行われてきた。なかでも注目したいのは、二〇〇六年に久慈市と合併した旧山形村（現・久慈市山形町）で飼育される短角牛（日本短角種）だ。

その加工を担う「総合農舎山形村」は、東京の大手自然派食品宅配企業、久慈市、さらには新岩手農業協同組合（JA新いわて）が出資し、一九九四年に設立された

と語るのは、取締役・所長の川村周^{しゅう}氏だ。うま味調味料や保存料を使わず、「安心でおいしい」というコンセプトのもと、短角牛を使ったハンバーグやパスタソース、カレーなどの加工食品の製造販売を手掛ける。

JA新いわて久慈営農経済センターの泉山祐介氏は、三者の連携の実情をこう語る。

「総合農舎山形村は、生産者から短角牛を一頭買いで仕入れて加工を行う。その仲介役となるのが、JAです」

すなわち、JAを介した六次産業化（注②）だ。生産者のひとり、JA新いわてくじ短角牛肥育部会長の中屋敷稔^{のぶ}氏は、山形町の短角牛についてこう説明する。

「夏山冬里……山形町の短角牛は、夏は広大な牧草地に放牧され、自然交配を経て冬に牛舎に帰ってくる。放牧地は起伏の激しい山間にありますから、牛は足腰が鍛

えられ、引き締まった肉質になるんです」

牧草は無農薬で、肥育時は国産一〇〇%の飼料が使われる。山形町の短角牛は徹底して健やかに育てられると、川村氏が続ける。

「短角牛はサシが入らない赤身肉で、かみしめておいしさが立つ。さらには健康に育った牛なので、脂身の旨みもやさしいんです」

実際、ハンバーグやパスタソースは、思わず笑みがこぼれる旨さだった。若い頃は牧場の跡を継ぐつもりがなかったという中屋敷氏が短角牛に関わることを決めたのも、その旨さゆえのこと。

「久慈をいったん離れ、あらためて食べたときに素直に『おいしい

（注②）六次産業化／農林水産物を収穫・漁獲（第一次産業）するだけでなく、加工（第二次産業）し、流通・販売（第三次産業）までを総合的に手がけ、農山漁村の豊かな地域資源を活用した新たな付加価値を生み出す取り組み。

い！』と感じました。にもかかわらず後継者や短角牛の数が大きく減少した様子を目の当たりにし、何とかしなければと思ったんです。短角牛のおいしさを知ってもらえれば、まだ十分チャンスはあると思っています」

中屋敷氏をはじめ四〇代の生産者は四名。一三軒ある牧場の多くは跡継ぎがない。また、首都圏をはじめ短角牛や赤身肉の人気・需要は確実に高まっているが、知名度や市場価格は黒毛和牛や霜降

左から総合農舎山形村の取締役・所長の川村周氏、JA新いわてくじ短角牛肥育部会長の中屋敷稔氏、JA新いわて久慈営農経済センターの泉山祐介氏。加工を担う人々、生産者、JAがひとつになり、短角牛の未来を拓こうとしている。下／自然のなかでのびのびと育つ山形町の短角牛。



総合農舎山形村の製造は、ほぼ手作りに近い工程。左／短角牛のシチューやカレーなどのレトルト食品は久慈駅や街中の「道の駅くじやませ土風館」などで販売されているほか、インターネットの通信販売にも対応。



り肉に及ばない。こうした現状を踏まえつつ、川村氏は未来を見据える。

「総合農舎山形村の加工スタッフも高齢化が進むなか、次の世代に短角牛の取り組みをどうつなげるかが私たちの課題です。短角牛はもともと希少ですし、無理に安売りしても続かない。自分たちの足を使って、細くとも長くつきあってくださいる消費者を見つけ、ブランド力、認知度を少しずつ上げていこうと考えています。それと並行して、畜産関連業が採算のとれる仕事であることを若い世代に見せていくこともわれわれの大事な使命です」

J Aの泉山氏も厳しい現実を理解しつつ、前向きにとらえる。

「短角牛をめぐる基盤は決して盤石ではありません。ただ、食への関心が高まっている中、伸び伸

びと健やかに育てる私たちの取り組みを知ってもらえれば、消費者に受け入れられ、ひいては生産数の増加につながることができると思っています。久慈では短角牛による闘牛も開催されているので、それも情報発信に活用したい。結果的に、地道で多様な活動が、新規就業者のなり手を増やすことにつながると期待しています」

短角牛のPRのため、関係者は市内で開催されるイベントにも積極的に参加。また、商品のパッケージには短角牛が健やかに育つ環境が丁寧につづられており、それにひかれて山形町へと訪れる消費者もいるそうだ。

実際に豊かな緑が広がる牧場を訪れた際には、のんびり草を食む牛たちのやさしい顔つきと脚のたくましさに魅了された。帰り際、「この景色をなくしたくないんです」とつぶやいた中屋敷氏の言葉もまた、深く胸に刻まれた。

豊かな自然を活用する グリーンツーリズム

久慈市内の各所で受け継がれて

きた自然の恵みを活かした取り組みが、官民が協力して行うグリーンツーリズムだ。久慈市観光交流課交流推進係長の中村武志氏たけしによれば、その発端は山形村短角牛の故郷である旧山形村だという。

「旧山形村では早くから高齢化や人口減少が懸念されていました。それに対応すべく、当時の村長が交流人口拡大と地域活性化のため、まちの資源を活かした取り組みとして始めたのがグリーンツーリズムなんです」

二〇〇五年度から本格的にスタートしたその内容は、小中学生を対象にして山の溪流を逆行しながら進むシャワークライミング、ロープで木登りをするラインクラ

イミングといった自然体験、畜産や農業、林業などの産業体験と多岐にわたる。さらには久慈市との合併により、漁業や琥珀採掘こまゆも加わり、二〇一八年度は首都圏の学校による教育旅行をはじめ延べ約五〇〇〇人が参加し



上／ほうれん草の出荷を手伝う農業体験。子どもたちの表情は真剣だ。左上／ヘルスツーリズムのプログラムには、樹齢700年ほどのけやきが見守る神社で行うヨガも含まれる。左／グリーンツーリズムの体験プログラムのひとつ「シャワークライミング」。川の流れに逆らい、大小の滝を登り上流を目指す。

(写真提供：久慈市)

ている。このツーリズムの片翼を担う民間団体「岩手県久慈市ふるさと体験学習協会」の菊池一弘氏たけしがその魅力を語る。「本物を体験してもらおう、というのがわれわれの一貫したテーマ。たとえば久慈の特産品であるほう



琥珀採掘現場跡に建つ「久慈琥珀博物館」では、昆虫の化石が入った琥珀を展示。採掘体験場ではティラノサウルスほか恐竜の化石も多数見つかっており、未来の観光資源として期待がかかる。



久慈市交流推進係長の中村武志氏(右)とふるさと体験学習協会の菊池一弘氏。官民の連携により、市民を巻き込んだグリーンツーリズムやヘルスツーリズムに取り組む。「地元の人が自分たちのまちを好きになって初めて、地域づくりは進んでいくのだと思います」と中村氏は話す。



れん草の農家では、実際に販売されるものの収穫を手伝ってもらっているので、現場での丁寧な仕事を体験できるんです」

「こころの体験」と銘打たれた教育旅行は民泊も含まれるが、そこには予想外の効果があったと中村氏は話す。

「緑や川、星空がきれい、ご飯

がおいしい、という子どもたちの声を聞き、久慈に住むわれわれが当たり前だと思っていたものに価値があると、民泊を受け入れた地元の方たちが気づいたんです。これは大きかったですね。地元の良いさを都会の人が教えてくれた。グリーンツーリズムを担うのは私たち市の役割ですが、地元の方に対しては、久慈の良さを再認識してもらい一つ、自らが地域づくりに貢献するという意識を持ってもらうことが大事だと思います」

菊池氏が解説してくれた、「学校の森づくり体験」も興味深い。

「学校単位で山を丸ごと貸し出し、達人と相談しながら時間をかけて自分たちの森を育むという企画で、現在三校が取り組んでいます。木を守るだけでなく、伐採も必要な森のしくみを体験してもらおう。さらには間伐した木を使い、ベンチや花壇づくり、シイタケの植菌なども行っています」

より裾野を広げるために現在、準備が進められているのが、女性を中心に大人を対象としたヘルスツーリズムだ。地元の飲食店の協力を得たヘルシーメニューも考案

された。中村氏によれば、この取り組みは市民の意識改革も視野に入れていくという。

「市民向けとして、健康づくりの意識を高めるツアーを催行しています。ガイドが指導する健康に効果的な歩き方を学んだり、塩分が控えめの食事の良さを認識したり、プログラムを介して毎日の生活を少しでも改善してもらうのが目的です」

観光事業としてのツアーは、二〇二〇年から本格的に始まる。健康を意識して久慈を訪れる人々にもたらすことになるだろう。

広域連携を確実にする 復興道路への期待

未来へとつながる希望の種は、まだまだある。市長の遠藤氏によれば復興道路の一環として、二〇二〇年度末には仙台市と八戸市を結ぶ三陸沿岸道路(無料高速道路)が開通するという。

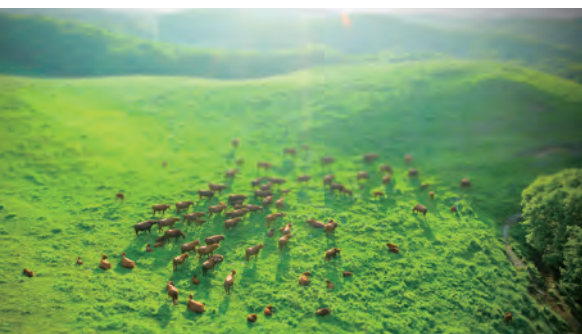
「交流人口を増やすためには、久慈市や岩手県という発想ではなく、隣接する宮城県や青森県、秋

田県も含めて広域で考えなければなりません。この道路がつながれば、より広く連携が生まれるはずですよ」

その開通をふまえ、大型の工場建設も予定されている。また、久慈市ほか岩手県、青森県、福島県の一二市町村が連携して電力を横浜市に提供する再生可能エネルギー事業も進行中だ。「あまちゃん」に続くロケ地誘致も積極的に行われ、二〇二〇年には多くの久慈市民がエキストラとして関わった映画『星屑の町』が公開される。

多方面でまかれた種は、岩手モリヤの森奥氏が魅せられた何事にも真摯に取り組む久慈の人々の気質と相まって、ゆつくりと、しかし着実に芽吹くことだろう。

上空から見た、短角牛の放牧風景。この広い牧草地で牛たちは自由に、ストレスなく夏場を過ごす。



対談

守 破 創

映画というメディアは、その作品が生まれた時代と社会を色濃く映し出すものだ。半世紀以上、古今東西の知られざる傑作を見いだしてきた映画評論家・佐藤忠男氏が、映画を通じて見たものとは。映画批評を書いていた経験もある原田泰審議委員が佐藤氏に、映画で世界を理解することはできるのかを問う。



日本銀行政策委員会 審議委員

原田 泰

Yutaka Harada

1950年東京都生まれ。74年東京大学農学部卒業後、経済企画庁入庁。国民生活局国民生活調査課長、調査局海外調査課長、財務省財務総合政策研究所次長、株式会社大和総研専務理事チーフエコノミスト、早稲田大学政治経済学術院教授などを経て、2015年3月より現職。著書に『日本国の原則』（日経ビジネス人文庫／石橋湛山賞）、『昭和恐慌の研究』（共著、東洋経済新報社／日経・経済図書文化賞）、『ベーシック・インカム 国家は貧困問題を解決できるか』（中公新書）等多数。

「批評の力」で世界へ伝える 知られざる映画に光を当て



映画評論家・日本映画大学名誉学長

佐藤忠男

Tadao Sato

1930年新潟県生まれ。新潟市立工業高等学校（現・新潟市立高志高等学校）卒業。57年『映画評論』編集者、『思想の科学』編集長を経てフリー。56年『日本の映画』でキネマ旬報賞を受賞。他に芸術選奨文部大臣賞、紫綬褒章、勳四等旭日小綬章、韓国王冠文化勲章、フランス芸術文化勲章シュバリエ章受章、モンゴル国政府優秀文化人賞等受賞多数。96年日本映画学校校長、2011年日本映画大学学長、現在同大学名誉学長を務める。著書に『日本映画史 全四巻』（岩波書店）、『世界映画史 上下巻』（第三文明社）、『大島渚の世界』（筑摩書房）、『恋愛映画小史』（中日映画社）等多数。

生きる希望を教えた
戦後の二本のアメリカ映画

原田 佐藤先生は、映画を通じて、自分たちは何者なのか、日本という社会は何なのかという問いに答えようとされてきたと思います。

黒澤明、溝口健二、小津安二郎、大島渚といった主要な監督の作家論、全四巻の『日本映画史』をはじめとした多くの著作を上梓されています。映画評論家の中でこれほどたくさん本を書かれた方は、いらっしゃらないと思いますが、書き続ける情熱がどこにおありなのかということからお聞きしたいと思います。

佐藤 情熱があって書いたんですかね。まず、私と映画の出会いからお話したいと思います。戦争中、海軍の予科練、海軍飛行予科練習生に行きました。特別に愛国的情熱に燃えて行ったわけではなくて、当時は誰でも行くものだったから行った。ところが、それで中学、高校と進む進学コースから外れた。予科練から帰ってきて、まだ十四、五歳です。非常に半端な形で社会に出ってしまった。

そこで、郷里の新潟の鉄道教習所に行った。もともと若い鉄道員が入学する学校だから、わずかだけれども国鉄（日本国有鉄道、現JR）から給料をもらえるんです。生徒に給料を払う学校です。後から考えたら、非常にいい学校に入ったというべきですが、その当時はわからない。給料をもらって勉強すればいいので、その給料をひたすら映画に使いました。

なぜそうしたかというところ、敗戦後、自分で物の考え方をどう切りかえていいかわからない。終戦の翌年の春ぐらいに、アメリカ映画が何年ぶりかで輸入されるようになって、そのときに観たのが、『キューリー夫人』という真面目な伝記映画と、『オーケストラの少女』で主演したディアナ・ダービンが二十歳ぐらいいなくなって出ている娯楽映画『春の序曲』。これにびっくりしました。なぜかというところ、映画がこんなに楽しいものだったのかと驚いたんです。例えば、若い女性が街を歩くのに、ちょっとリズムを持って、非常に楽しそうな歩き方をする。そして、それを通りすがりの男たちがみんな、ああ、いい娘だなというような感じで振り返っていく。非常に楽しそうな若者たちがアメリカにはいる。それで病みつきになった。『キューリー夫人』では、ムツシュ・キューリーが、自分の弟子で学生だった彼女に求婚する。非常に女性を立てて、ひざまずくようなイメージで求婚する。これはすごいなと思いました。そのときから、人生いい恋愛ができればそれでいい、そう信じちゃったんです。自分は小学校だけで軍隊に行つて、進学しそびれて、出世コースにはもう向いていない。では人生に希望がないかといえば、恋愛して、アイ・ラブ・ユーと男のほろがひざまずくようにして彼女に言う、こういう経験をするために人生がある、そう思い込んだ。これは成功しました。

原田 すてきな奥様ですからね。
佐藤 そのとおりになった。だから、私の人生は成功したんです。学校に戻ったら、先生が昨日とは違って民主主義を教え始めた。私の同世代は大体そういう経験を持っています。私はそう裏切られたとは思いませんでした。別の

人生の目標が見つかったからです。それが恋愛です。目の前に恋人がいるわけじゃない。恋愛を空想させてくれるのはアメリカ映画です。だから、アメリカ映画を夢中になって観たんです。ところが、鉄道教習所に三年いて、卒業して職場に出るとすぐ、公務員を対象に一〇万人ぐらいの首切りがあり、私は真つ先に首になりました。

任侠映画の評論から始まった

原田 戦後一九四九年のドッジの大緊縮策ですね。

佐藤 そこで、地元新潟の電信電話公社（現NTT）の電話機の修理工場で働きましたが、その仕事に情熱は感じなかった。やっぱ映画にかかわりのある仕事をしたかと思つたんですが、助監督になれるのは、私の同世代でいうと、大島渚とか山田洋次とか今村昌平とか、一流大学の優秀な卒業生なんです。そういう人間でないとなれない時代になっていった。

それで、シナリオなら書けるんじゃないかと思つた。シナリオ作家養成所みたいな機関があち

こちにあつて、そこで二、三本書いたのですが、結論として、自分にはシナリオ作家になる才能がないとわかりました。

ただ、シナリオを書くために映画の勉強を始めました。休日には、夜行列車で東京に行つて、古本屋街を歩いて、リュックサックにいっぱい昔の映画雑誌などを買い込んで、その晩の夜行で帰つてくるといふような生活をしていました。伊丹万作監督が、戦争中、『日本映画』という雑誌でシナリオの批評を書いていた。これが非常に勉強になりました。映画を論ずることを伊丹万作から学びましたね。

それで、シナリオを書く才能はないけれども、映画を観て議論をする才能はあるということに気がつきました。映画雑誌に投書するようになって、投書の常連になりました。映画雑誌だけではつまらないと思つて、『思想の科学』という雑誌にも投書したところ、これを鶴見俊輔さんが読んで絶賛してくれました。鶴見さんは、当時、若手の哲学者の中で一番有名でした。鶴見さんのおかげで、当時の

思想界の若手の間で私の名前が知れ渡って、『思想の科学』の編集にも携わるようになりました。

当時、私が書いて一番評判になったのは、任侠映画を思想的に論じた「任侠について」です。これも始まりは、鶴見さんが似たような論文を書いていたから、そのまねだったんですが、私のほうがリアリティーがあると思われた。鶴見さんの書くチャンバラ論は怪しいと思われた。

原田 こんなインテリが本当に理解しているのかという感じでしょか。鶴見さんは戦前にハーバード大学に留学していたぐらいの人ですからね。

佐藤 鶴見さんに絶賛されたので、ほかの雑誌からも原稿の依頼が来るようになった。どたばた喜劇のエノケン（榎本健一）にも、通俗メロドラマにも思想があると書きました。それで注目され、映画雑誌の編集部に入れてもらって批評家になりました。民衆の思想というのはいくつものものと私が論じたら、これが時代の先端を行くように注目されました。

自分に書けることは何だろうと

いうことから始めて、庶民的な大衆映画を分析すると、それまでなかった大衆映画論という評論の分野ができました。しかし、こればかり書いているわけにもいかない。

映画評論は、専らもう少し高尚な映画を論じてきました。ルネ・クレール、ジュリアン・デュヴィヴィエとか。だから、それは私だつて論じられると言つてそういうものも書いたら、そつちも通用した。

原田 フランスのヌーベルバーグの批評も書かれましたね。

佐藤 そういうものを書いているうちに、大島渚が私に目をつけて、「自分はもうじき監督になって、独特の流れをつくり出す。その流れを褒めるのは佐藤だ」と言ってくれました。私は、学生運動の理論的根拠みたいなものを書いた。誰にも書けない大島渚論を書いた。大島はちゃんとそういう計算をして私を自分の代弁者にしてました。私もそれに乗り気になりました。そうすると、低学歴の通俗映画評論家というレッテルが消えて、難しい映画も論じられる批評家になっていました。

日本映画の解説者として私は

応認められて、国際交流基金が日本映画の宣伝のためにアジア諸国のあちこちで映画会をやる、その講師に派遣されたりしました。それは、映画論だけでなく、日本の社会、文化まで論じてほしい、ということがあったからだと思います。

アジアの映画を発掘し 批評の力で世界に広める

原田 世界に映画を広め始めるわけですね。

佐藤 最初は、山田洋次監督の『幸福の黄色いハンカチ』を持って、監督ご本人と二人でタイ、フィリピン、インドネシアで上映して回りました。山田さんはもちろん『幸福の黄色いハンカチ』の話をし、私はそれと一緒に上映した小津、溝口、黒澤の作品の解説をしました。

そして、行く先々で大抵、「あしたは観光でご案内します」と言われる。そのとき、山田さんと私は、「観光はいいですから、あなたの国の最近一番ヒットした映画を観てください」と頼みました。これらの国のヒット映画を観ると、いいところがあります。

タイに行ったとき、最近のタイの映画では何がおもしろいですかと聞いたら、インタビュに来た記者が、タイの知識層はタイの映画を観ませんと言った。

原田 昔、日本でもそういうところがありましたね。

佐藤 日本は昭和二年（一九二七）にそれを終えたんです。昭和二年とはどういう年か。伊藤大輔の『忠次旅日記』と、翌年には五所平之助の『村の花嫁』、この二本の傑作があらわれて、日本映画もようやく世界の水準に達したと、みんながそう言った頃です。これは飯島正先生から聞いたのですが、昭和二年に日本の知識層は——知識層というのは中学生以上、要するに、英語を習っているということですから、日本映画を観ることを恥ずかしながらに済むようになりました。タイの人の話を聞いたときに、義憤を感じましたね。

そこで、日本の国際交流基金の出張所の人にタイのヒット作を聞いたんです。そうしたら、ビデオを届けてくれました。それを山田さんと二人で観て、結構いいじゃ



れた映画もつくりました。

とにかく、日本でアジアの映画の話をするだけでも大変な影響があるんですね。これは一九五一年に『羅生門』がベニス国際映画祭でグランプリ（金獅子賞）をとったときに私が感じたことです。日本映画は決して悪くないと思っていましたが、国際的に評判にならない。しかし、やっと日本映画が国際的に認められる時代が来た。黒澤さんも喜んだろうけれども、私もそのときものすごく喜んだ。だから、いい映画を観たら、やっぱり褒めなきゃいけない。

ころ、後日その監督から電話がありました。日本に留学していた青年が、タイの新聞に、「東京の新聞にタイの映画の記事が出た」と書いた。そうしたらその監督が喜んで、訪ねてきたんです。ちなみに、そのとき私は彼と義兄弟の縁を結びました。

ちょっとした記事を書いただけなのだけど、タイ映画が日本の大新聞の記事になったというだけでタイにとっては大変な事件です。非常に喜んで、彼はそれから熱心に努力して、岩波ホールで上映さ

今や日本にいても、フィンランド映画もセネガル映画も、注意していれば誰でも観ることができ。例えば、フィンランドの『アノウン・ソルジャー』は素晴らしい。

原田 大国を利用するつもりが翻弄される。小国の普通の人々がどう戦争と向き合ったかを描いた、ひたすら悲しい戦争映画ですね。

佐藤 非常に伝統のある国、フランスやドイツの芸術家がつくっている映画だけが映画じゃない、東南アジアにも観る価値のある映画がある。なぜか私、アジア諸国に講演に呼ばれることが多くて、韓国とか中国に呼ばれて、そこでその国の映画を発見しては絶賛する。そうすると、その国で一つの伝説が生まれます。例えば中国映画なんて、六〇年代ぐらいまではほとんど世界には知られていなかった。韓国もそうですね。しかし、それらの国にも世界的な水準でいい映画があるということを論ずる。

原田 四〇年代の中国映画を発掘されたという話もありますね。

佐藤 七〇年代、中国映画界と親

しかったのは徳間書房の徳間康快さんですけれども、一九六六年に始まった文化大革命のために中国は一〇年間鎖国状態になって、外国映画の情報が全く入らなくなっていました。それで、中国が、世界の映画情勢について話ができる人を紹介して欲しいと徳間さんに頼んで、私が中国に行くことになりました。

そのとき、中国では当時の社会主義イデオロギーの新作がいろいろあって、それを私に観せようとする。しかし私は、「中国には、日中戦争の直前それから直後、この頃にいい映画があると聞いた、それを観せてください」と熱心に頼んだら、探してきて一〇本ばかり観せてくれた。これが素晴らしいかった。

第二次大戦直後は、世界の新しい映画といえばイタリアのネオリアリズムが評判だったんですが、四九年、社会主義になる直前につくれた『カラスと雀』は、ネオリアリズムのトップクラスの作品と比べても決して劣らない、非常にすぐれたリアリズムの映画です。私はこういう映画を観て絶賛

する。中国語も英語もできないのに、何か熱狂的に褒めているというだけでは中国人にも伝わる。批評はけなすことによって影響を及ぼすと思われているようですが、人はけなした批評を信じません。むしろ褒めることが確実に影響を及ぼします。

これをきっかけに世界に全く知られていない中国映画も、一九四〇年代には世界的水準の作品が一〇本や二〇本はある、そういうことが国際的に知られるようになって、イタリアのミラノで中国映画の古い作品だけを一〇〇本ほど集めた上映会が行われました。知られざる映画史の発掘競争みたいなものが行われて、私はそのトップランナーだったわけですね。そういう意味で、この頃映画批評家として先頭を走っている一人だという自覚を持つようになった。一度そういう自覚を持つと、いかげんにやめられないですね。

本です。なぜかというところ、タイの映画がどうかとか、メキシコの映画がどうかとか、そういうことがいっぱい書いてあって、偉大なるルノワールなどについては誰でもが書けるような程度にしか書いてないからです。

ですが、そうになると私も意地です。よく探せば世界中どこにもいい映画がある。こういうことが常識になるまで頑張ろうと思っています。

インドでは、デリーとムンバイで、古くから歌と踊りの映画がいつぱいつくられています。実はインドで映画をつくっている土地は二〇カ所ぐらいあります。ローカルの映画でリアリズムの映画がある。私がインドの映画で一番好きなのは、南の端っこのインド洋側にあるケーララ州のマラーヤラム語映画。年間二〇本か三〇本はつくっている。私が「あなたの映画史上のベストワン、生涯のベストワンは何ですか」と問われたら、普通の場所では小津の『東京物語』ですと答えますが、少し常識外の知識も持っているような人には、インドのケーララ州

のG・アラビンダンという監督の『魔法使いのおじいさん』ですと答える。これはほとんど誰も知らない映画ですが、日本でも三度ぐらい深夜にテレビで放送されたことがあります。児童映画ですが、童心というものをこんなに天衣無縫に描いた映画は、私の長い映画人生でこれ以上のものはないですね。

映画は世界を結ぶ文化 人々は理解しあえる

原田 映画で日本を理解するということから出発されたと思います。が、今や世界を理解しようと思われていますね。世界を理解できたと思われませんか。

佐藤 まだまだ。ちよつとのぞくことも容易じゃないのはイスラム世界です。だから、イスラム系の映画を観る機会を一生懸命狙っています。でも恋愛映画がない。しかし、よくよく探せばある。イランなんかには多いのですが、例えば、テヘランの街角で若い男女がしばらく立ち話をしている。すると、通行人か誰かが民警を呼んで、怪しいと密告する。親が呼び出さ

れて、親は早速病院に娘を連れていく。なぜかというところ、処女性失われていないかを確認するためなんです。イランでは町なかで立ち話をするぐらいでしか男女交際ができない、そちらのほうが問題じゃないか。そういうテーマの映画がイランでは結構あります。私は、そういう映画人たちこそ世界を良くするための同志であって、そういう映画をもっと広めないといけないと思っています。

アメリカで、イランは恋愛の自由もない国だと思っている人は多い。しかし、少なくともイランには恋愛の自由を求める映画があり、それが支持されている。自由と真実と寛大さを求めるさまざまな国の映画を、世界に広め、褒めたたえることを続けなければならぬ。

世界の映画は、実に一部分しか観られていません。世界には、誰も知らないようなところに誰も知らない傑作をつくっている映画人が存在します。だから、映画批評を書くことはやめられないんです。**原田** 本日は大変興味深いお話をありがとうございました。

日本初開催のG20を 総力をあげてサポート

二〇一九年六月、福岡県福岡市で「G20財務大臣・中央銀行総裁会議」が行われました。日本が初めて議長国として開催するG20を、財務省や金融庁をはじめ多方面の関係者と協力しつつ水面下で支えたのが「国際局国際連携課」です。同課は、毎年、国内外で多数開催される国際会議における日本銀行の窓口的役割を担っています。広く報道された表舞台の裏では、準備や調整、当日の進行、各国中央銀行総裁ほか来日した代表団のおもてなし、滞在のサポートなど、国際局国際連携課をはじめ日本銀行のスタッフが全力を尽くし、会議を成功へと導きました。

多方面との連携を図り G20ほか国際会議を支える

国内外で主に日本銀行総裁や国際担当理事が参加する国際会議において窓口となり、企画や調整の役割を担うのが国際局国際連携課です。課名のとおり国をまたがる「連携」が主な仕事です。課長の

上原博人さんはこのように話します。

「最近の国際会議は専門的な話題が増えていきますので、議題に応じて担当する行内の他の関係部署から知見を得る必要があります。また、経費やシステムに関する部署を含めた行内のさまざまな部署、そして関係する省庁等とも相談しながら準備を進めなければなりません。で



各国財務大臣・中央銀行総裁が集まりました (写真出典：財務省・日本銀行)

すから当該では、日々、国内外の関係者と電話やメールでの綿密なやり取りが行われています」

一年を通して、多くの国際会議が世界各国で開催されますが、二〇一九年に国際連携課が総力をあげて準備を進めたのが、六月八〜九日に福岡県福岡市で行われ、日本が初めて議長国を担った「G20財務大臣・中央銀行総裁会議」でした。G20とは、Group of Twentyの略で、カナダ、フランス、ドイツ、イタリア、イギリス、アメリカ、そして日本のG7に加え、アルゼンチンやオーストラリア、ブラジル、中国、インド、インドネシア、韓国、メキシコ、ロシア、サウジアラビア、南アフリカ、トルコ、さらには欧州連合（EU）・欧州中央銀行（ECB）を加えた二〇カ国・地域のことです。

これほどの大規模な会議の開催に携わることは日銀としては多くありません。このため、約三〇名の国際連携課スタッフが中心となりつつ、福岡支店を含めた行内部署間の垣根を超えた体制づくりや準備が進められました。なかでも議長国ならではの重要な役割の一つに、会議の議題の設定があります。

「現下の国際的な議論に貢献できる話題を模索するとともに、G20財務大臣・

中央銀行総裁会議は単発の会合ではなく、G20サミットという首脳会合に向けた一連の関係閣僚会合の一つであることも念頭に置く必要があります。また、一九九九年の第一回会議から継続されてきた話し合いを受け継ぐことも考慮しなければなりません。過去の議長国から学びつつ、その流れを今年日本が担い、次にバトンを渡す感覚です」

人口高齢化という課題に対し 活かされた日銀の知見

議題の設定に関しては、日本での開催が決定してから、五〜六人の専門のチームをつくり、対応しました。そのなかで総括を担ったのが、国際局審議役（G20関係）の中村康治（こうじ）さんです。

「各国から集まる財務大臣や中央銀行総裁に討議をもらうための材料提供として、日銀、財務省、金融庁の事務方レベルでテーマを出し、すべての議事を決めていくのが大きな仕事でした。国際会議は基本的に、うまくいってあたりまえ。そうしたプレッシャーの中、気を配るべきことは数多くあり、多方面に注意を払いましたね」

議長国としての役割は、福岡でのG20本番の二日間だけではなく、丸一年にわ

たります。一月の東京、四月のワシントンD.C.と事前に大小の会議やシンポジウムが行われ、少しずつ本会議に向けて認識が共有されていきました。

最終的に課題として注力したのは、①世界経済におけるリスクと課題の整理、②成長力強化のための具体的取り組み、③技術革新・グローバル化がもたらす経済社会の構造変化への対応、という三つ



財務大臣・中央銀行総裁会議の様相
（写真出典：財務省・日本銀行）



会議期間中の日本銀行作業室

の柱です。なかでも日銀の知見が活かされたのは、①に含まれる人口高齢化という課題でした。

「人口高齢化は日本に限らず、今や世界的な課題です。日銀は高齢化が経済に与える影響を長年にわたって研究し、多くの知見があります。そうした知見を活かし、教訓を各国と共有することで、世界経済の成長力の押し上げに貢献したいという思いがありました」

実際の運営では、大臣・総裁レベルでの議論が活発に行われるよう、たとえば人口高齢化の議論においては、各国の高齢化の程度の違いに応じて三つのグループに分けるなどの工夫をしました。会議期間中は、議事の運営が円滑に進むよう、麻生太郎財務大臣とともに共同議長を務めた黒田東彦^{はるひこ}日銀総裁のサポートに専念。また、会議が始まる前から、中村さんほか日銀、財務省、金融庁の担当者は合意文書作成のための調整を行いました。

「大臣総裁会議の終了後はコミニケ（公式声明）が発表されますが、そのためには、全員が納得する文書を作成する必要があります。今、無事にすべてを終えてあらためて思うのは、議題の設定をはじめ、とにかく事前の綿密な準備が重要だということです。世界経済の情勢については日銀の海外事務所からの情報に加え、国際会議での場を含めて、各国当局と常に率直な意見交換を行い、地道に認識の共有を図っていく。そうした継続的な努力が大事なのだと実感しました」

議題の設定と並行して行われたのは、ロジ（後方支援）の業務です。今回の参加者は、財務大臣、中央銀行総裁クラス

だけでも約六〇人。随行する代表団が約四〇〇人。移動や食事の手配から日本を紹介する文化イベントの開催まで、多岐にわたるおもてなしの準備に携わりつつ、予算管理や契約などを幅広く担ったのが柳内健吾^{やなぎうち}さんです。

「海外からの参加者に加え、われわれ日銀スタッフ、財務省、警察、報道関係者などを含めると、二〇〇〇人程度が福岡県に集結することが想定されました。開催地である福岡県、福岡市、福岡県警、福岡財務支局とも連携を取る必要があったため、事前段階における調整が一番大変でした。書類バッグのような備品をはじめ、何をどれくらい調達するかなど、ひとつひとつ議論しましたが、なにしろ決めるべきことが大量にありました」

綿密な準備のかいあって、開催中は大きなトラブルもなく進み、やぶさめや纏^{まと}（戦や消防の際に用いられた旗印の一種）、各国のイメージをデザインした着物の披露など、文化イベントは好評を博しました。その陰では、代表団向けのビュッフェについて、菜食主義の参加者向けのメニューを増やしてほしいといったリクエストがあったり、事前に渡されたIDパスをホテルに忘れたゲストがいたり、想定外の要望や対応に追われた



福岡市美術館における夕食会の様子（写真出典：財務省・日本銀行）

ケースもあったとのこと。
また、八、九日の本会議の直前には、代表団によるコミュニケーションの原案作成作業が明け方にまでおよんだため、帰りのタクシーの手配などでスタッフも遅くまで待機しました。裏方のスタッフの苦勞と配慮は想像をはるかに超えるものでした。

「終了後に痛感したのは、情報共有の

大切さです。食事や輸送に関する情報の一部が末端の担当者まで届いていなかったこともありました。一〇〇〇人規模の情報共有は容易ではないものの、その仕組みを整えることが重要な課題だと思っています。個人的には、生まれ育った福岡県での一大イベントに携われたのが、得がたい経験でした」

各国の中央銀行総裁に同行し 陰ながら会議を支えるリエゾン

会議中、リエゾン（要人の誘導・案内役）と呼ばれる二五名の専任スタッフが日銀から派遣され、来日した各国中央銀行総裁に同行しました。万全を期すため、フライトの確認、ホテルまでの移動手段の調整など事前の準備が進められました。ところが、木村百合子さんが担当したアルゼンチン中央銀行総裁の場合、間際まで来日に関する連絡がなく、はらはらしたと振り返ります。

「随行員がいらつしやらず、総裁がおひとり東京から新幹線で博多に移動するとわかったのが、前日でした。博多駅で警備を担う福岡県警に伝達する必要もあり、直接ご本人にお電話を差し上げ、乗車される新幹線の時間や座席の位置などを確認しました。お目にかかるま

では緊張したものの、お会いして最初にファーストネームで呼んでください、と言われたんです。リエゾンのもてなしは、日本式の細やかな気配りも重要ですが、受け身であつてもいけません。積極的なコミュニケーションを取りやすくしてくださった総裁の心配りに感動しましたね」

また、担当したアルゼンチン中央銀行総裁をはじめ、参加者、関係者の様子も印象深く心に刻まれたそうです。

「時には遅い時間まで、会議以外でも各国間でコミュニケーションを取っていらつしやる。そういう人と人との関係がしっかり構築されているからこそ、会議では白熱した議論が生まれる。その会議に集中していただくためにも、私たちがリエゾンとしてサポートする役割の重さを実感しました」

FSB（金融安定理事会）のリエゾンを担当した庄子可那子（しょうじ）さんの場合は、FSBが所在するスイスのバーゼルだけではなくアメリカからも代表団が来日。双方の要望をうまくみ取るために、詳細が決まっていな事項を細かく簡条書きにしてやり取りをするなど事前の確認に努めたそうです。

加えて庄子さんは、八日に行われた財

務大臣や中央銀行総裁が参加した公式夕食会の司会という大役も務めました。財務省ほかの関係者に確認を取りつつ、司会の原稿作成等の事前準備も周到に行いました。

「参加者はネイティブスピーカーではない方が大半なので、司会進行の発言にあたっては過度に洗練された表現や難しい単語を避け、わかりやすい言葉を使うよう心がけました。また上司のアドバイスを受け、普段よりもゆっくり話す練習を重ねました」

夕食会の翌朝、「すっかりした顔をしているね」とFSB代表团の方に言われたと庄子さんは笑顔を見せました。リエゾンとの兼務で、当日までかなり多忙だったそうです。

金融市場局総務課の野嶋文乃あやのさんのように、国際連携課以外の部署から派遣されたリエゾンもいました。野嶋さんが担当したのは、インドネシア中央銀行の代表团。イスラム教徒であることから、事前の準備ではとくにハラール（イスラム法で食べることが許されている料理）がしっかりと準備されていることに気を使ったと話します。会議中は事前の予定にない面談が急に設定されるなど、スケジュールが刻々と変わるため、気が抜け

ない状況が続きました。長時間一緒に行動するなかで、野嶋さんの目に映ったのもまた、会議に真摯しんしに取り組む参加者の姿でした。

「インドネシアを含め、代表团が集まると、常に議論が行われていました。緊張感もあるなかでお疲れだったと思うのですが、皆さん、会議が終わってからも精力的に参加者とコミュニケーションを取られていました。そうした姿はリエゾンだからこそ間近で拝見できた、貴重な



会議室前で議論する代表团（写真出典：財務省・日本銀行）

光景だったと思います。日程変更への対応をはじめ大変な業務ではありましたが、副総裁からは感謝の言葉もいただき、最後にはアヤノはインドネシア中央銀行のファミリーの一人だよと言われて、本当にうれしかったです」

福岡のG20は、会議の内容から進行、おもてなしまで、各方面の参加者から高い評価を得て終了したと、課長の上原さんは話します。

「滞りなく終えられたのはもちろんですが、これまでの蓄積を活かしつつ、効率的に会議運営を進めることができたのが大きな成果でした。それぞれの職員にとっても、さまざまな経験を積む実り多い会議だったと思います。今後も、国際会議の議長国の運営を担うことができる人材を地道に育てていく日々の努力が必要だとも再認識しました」

議長国としての最後の務めは、十月にワシントンD.C.で開催される会合です。今回得られた経験は今後に活かされることでしょう。国際連携課の「連携」は、G20が終わっても続きます。

（肩書は取材当時）



日本銀行のレポートから

日本銀行は、1、4、7、10月の政策委員会・金融政策決定会合において、先行きの経済・物価見通しや上振れ・下振れ要因を詳しく点検し、そのもとでの金融政策運営の考え方を整理した「経済・物価情勢の展望」（展望レポート）を決定し、公表しています。本稿では、2019年7月の展望レポート（基本的見解は7月30日、背景説明を含む全文は7月31日公表）のポイントを解説します。

*全文は日本銀行ホームページに掲載されています。<https://www.boj.or.jp/mopo/outlook/index.htm/>

「経済・物価情勢の展望」（展望レポート）

— 二〇一九年七月 —

二〇一九～二〇二一年度の 中心的な見通し（図表1・2）

【景気】

当面、海外経済の減速の影響を受けるものの、二〇二一年度までの見通し期間を通じて、景気の拡大基調が続くとみられる。

輸出は、当面、弱めの動きとなるものの、海外経済が総じてみれば緩やかに成長していくもとで、基調としては緩やかに増加していくと考えられる。国内需要も、消費税率引き上げなどの影響を受けつつも、きわめて緩和的な金融環境や政府支出による下支えなどを背景に、増加基調をたどると見込まれる。

【物価】

消費者物価（除く生鮮食品）の

前年比は、プラスで推移しているが、景気の拡大や労働需給の引き締まりに比べると、弱めの動きが続いている。中長期的な予想物価上昇率は横ばい圏内で推移している。

もっとも、マクロ的な需給ギャップがプラスの状態が続くもとで、企業の賃金・価格設定スタンスが次第に積極化し、家計の値上げ許容度が高まっていけば、価格引き上げの動きが拡がり、中長期的な予想物価上昇率も徐々に高まるとみられる。この結果、消費者物価の前年比は、2%に向けて徐々に上昇率を高めていくと考えられる。

リスクバランス

経済の見通しについては、海外

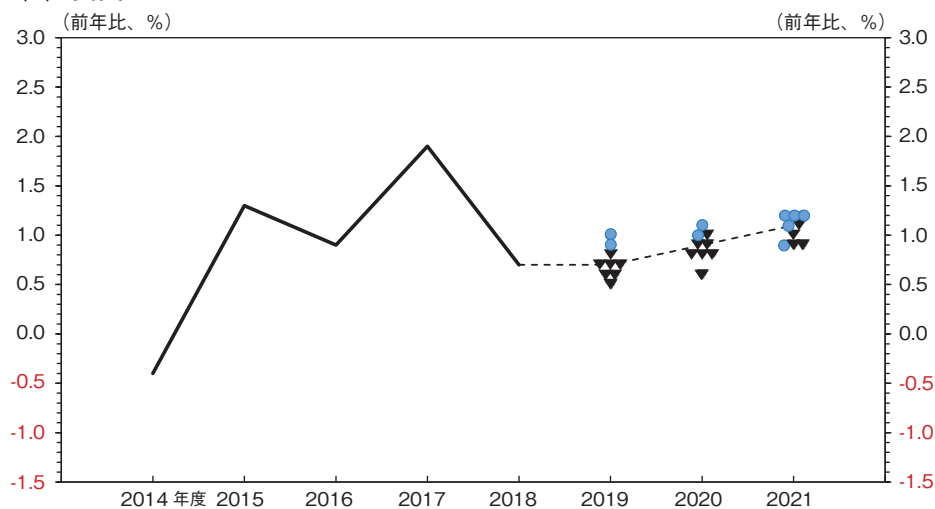
経済の動向を中心に下振れリスクの方が大きい。物価の見通しについては、経済の下振れリスクに加えて、中長期的な予想物価上昇率の動向の不確実性などから、下振れリスクの方が大きい。2%の「物価安定の目標」に向けたモメンタムは維持されているが、なお力強さに欠けており、引き続き注意深く点検していく必要がある。

金融政策運営

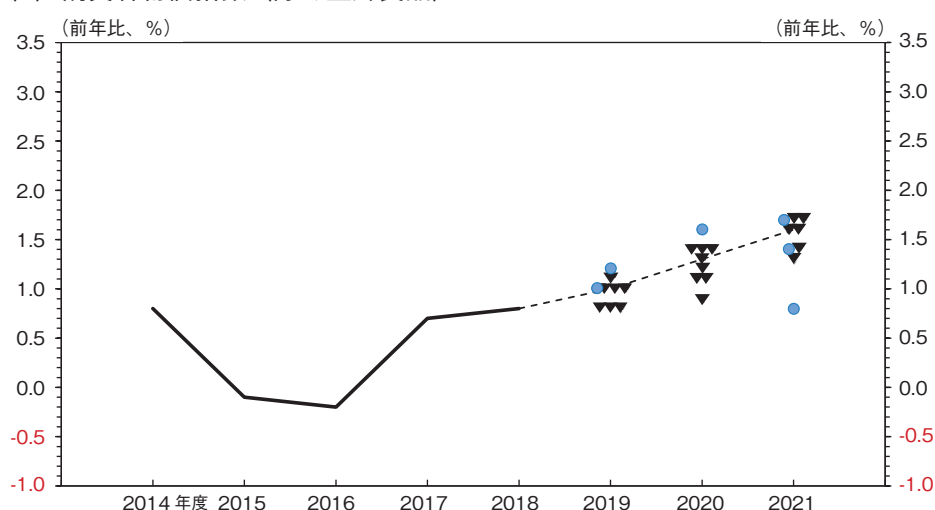
2%の「物価安定の目標」の実現を目指し、これを安定的に持続するために必要な時点まで、「長短金利操作付き量的・質的金融緩和」を継続する。マネタリーベースについては、消費者物価指数（除く生鮮食品）の前年比上昇率の実績値が安定的に2%を超える

図表1 政策委員の経済・物価見通しとリスク評価

(1) 実質 GDP



(2) 消費者物価指数 (除く生鮮食品)



(注1) 実線は実績値、点線は政策委員見通しの中央値を示す。

(注2) ●、△、▼は、各政策委員が最も蓋然性が高いと考える見通しの数値を示すとともに、その形状で各政策委員が考えるリスクバランスを示している。●は「リスクは概ね上下にバランスしている」、△は「上振れリスクが大きい」、▼は「下振れリスクが大きい」と各政策委員が考えていることを示している。

(注3) 消費者物価指数 (除く生鮮食品) は、2014年度、2015年度については、2014年4月の消費税率引き上げの直接的な影響を除いたベース。

図表2 政策委員見通しの中央値

(対前年度比、%)

	実質GDP	消費者物価指数 (除く生鮮食品)	(参考) 消費税率引き上げ・教育 無償化政策の影響を除くケース
2019年度	+ 0.7	+ 1.0	+ 0.8
(4月時点の見通し)	(+ 0.8)	(+ 1.1)	(+ 0.9)
2020年度	+ 0.9	+ 1.3	+ 1.2
(4月時点の見通し)	(+ 0.9)	(+ 1.4)	(+ 1.3)
2021年度	+ 1.1		+ 1.6
(4月時点の見通し)	(+ 1.2)		(+ 1.6)

(注) 消費税率については、2019年10月に10%に引き上げられること(軽減税率については、酒類と外食を除く飲食品および新聞に適用されること)、教育無償化政策については、幼児教育無償化が2019年10月に、高等教育無償化等が2020年4月に導入されることを前提としている。

まで、拡大方針を継続する。政策金利については、海外経済の動向や消費税率引き上げの影響を含めた経済・物価の不確実性を踏まえ、当分の間、少なくとも二〇二〇年

春頃まで、現在のきわめて低い長短金利の水準を維持することを想定している。今後とも、金融政策運営の観点から重視すべきリスクの点検を行うとともに、経済・物

価・金融情勢を踏まえ、「物価安定の目標」に向けたモメンタムを維持するため、必要な政策の調整を行う。特に、海外経済の動向を中心に経済・物価の下振れリスク

が大きいため、先行き、「物価安定の目標」に向けたモメンタムが損なわれる恐れが高まる場合には、躊躇なく、追加的な金融緩和措置を講じる。



日本銀行のレポートから

「地域経済報告」（さくらレポート）は、日本銀行本支店等が、日頃、企業ヒアリング等を通じて行っている各地域の経済金融情勢に関する調査の結果を、年4回（1月、4月、7月、10月）の支店長会議の機会毎に取りまとめたものです。また、その時々の特ピックスについても、本報告の別冊として、原則年2回、まとめています。

*全文は日本銀行ホームページに掲載されています。 <https://www.boj.or.jp/research/brp/rer/index.htm/>

「地域経済報告」（さくらレポート）

I. 各地域の

景気判断の概要

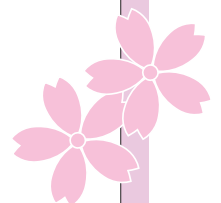
— 二〇一九年七月 —

各地域の景気の総括判断をみると、全ての地域で「拡大」または「回復」として、いる。この背景としては、輸出・生産面に海外経済の減速の影響がみられるものの、企業・家計両部門において、所得から支出への前向きな循環が働くもとで、国内需要の増加基調が続いていることがある。

前回（一九年四月時点）

	【19/4月判断】	前回との比較	【19/7月判断】
北海道	緩やかに回復している	➡	緩やかに回復している
東北	一部に弱めの動きがみられるものの、緩やかな回復を続けている	➡	一部に弱めの動きがみられるものの、緩やかな回復を続けている
北陸	緩やかに拡大している	➡	緩やかに拡大している
関東甲信越	輸出・生産面に海外経済の減速の影響がみられるものの、緩やかに拡大している	➡	輸出・生産面に海外経済の減速の影響がみられるものの、緩やかに拡大している
東海	拡大している	➡	拡大している
近畿	緩やかな拡大を続けている	➡	一部に弱めの動きがみられるものの、緩やかな拡大を続けている
中国	緩やかに拡大している	➡	緩やかに拡大している
四国	回復している	➡	回復している
九州・沖縄	緩やかに拡大している	➡	緩やかに拡大している

（注）前回との比較の「➡」、「➡」は、前回判断に比較して景気の改善度合いまたは悪化度合いが変化することを示す（例えば、改善度合いの強まりまたは悪化度合いの弱まりは、「➡」）。なお、前回に比較し景気の改善・悪化度合いが変化しなかった場合は、「➡」となる。



と比較すると、全ての地域で総括判断に変更はないとしている。ただし、米中貿易摩擦など

を受けて、海外経済の先行き不透明感の高まりやその影響を指摘する声が幾分増えている。

Ⅱ. 別冊「インバウンドの現状」

企業等の取り組みと地域活性化の注目点

— 二〇一九年六月 —

1. はじめに

わが国を訪れる外国人旅行者数は、着実な増加が続いている。その背景には、政府がインバウンドを含む観光の振興を「成長戦略と地方創生の大きな柱」と位置付け、誘客に向けた様々な施策を進めていることなどがある。企業や自治体等でも、インバウンド需要の取り込みを図る動きが広がっており、とりわけ地方では、急速に進行する高齢化や人口減少に対する危機感か

ら拡大するインバウンド需要への期待感が大きい。二〇一九年のラグビーW杯や二〇二〇年の東京オリンピック・パラリンピックといった世界的なスポーツイベント、さらには二〇二五年の大阪・関西万博の開催も、そうした動きを加速させている。

そこで、日本銀行の本支店・事務所では、「インバウンドの現状・企業等の取り組みと地域活性化の注目点」をテーマに、全国約一三〇〇先の企業や自治体等に聞き取り調査を

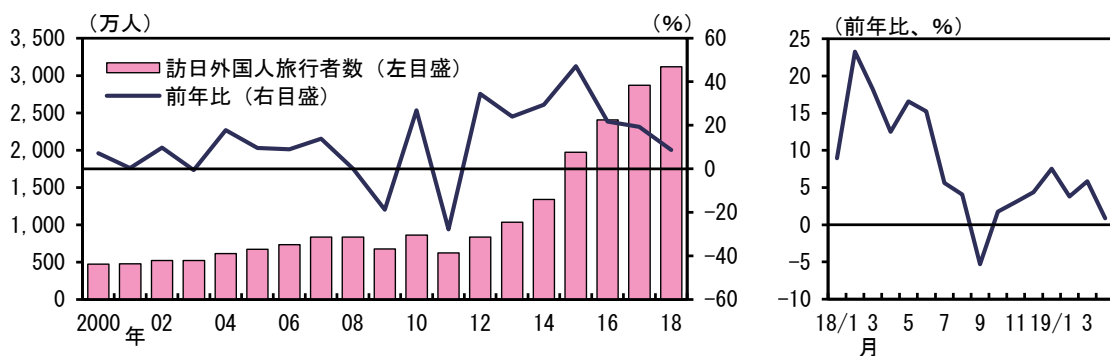
実施した。以下では、まず最近のインバウンド需要の動向や特徴点について確認する。次に、インバウンド需要の獲得に向けた企業や自治体等の取り組みを紹介する。最後に、インバウンド需要を地域活性化につなげるうえでの課題を整理し、先行きを展望する。

2. 最近のインバウンド需要の動向や特徴点

(1) 訪日外国人旅行者数の動向

二〇一八年の訪日外国人旅行者数は三一一九万人となり、過去最高を記録した(図表1)。二〇〇〇年代入り後を振り返ると、SARSの流行等が

図表1 訪日外国人旅行者数の推移



(注) 2018年および2019年1、2月は暫定値。2019年3、4月は推計値。
(出所) 日本政府観光局(JNTO)

あつた二〇〇三年とリーマン・ショック後の二〇〇九年、東日本大震災が発生した二〇一一年を除き、訪日外国人旅行者数は一貫して増加しており、その規模は直近一〇年間で三・七倍に拡大した。

伸び率をみると、近年は前年比二桁台の高い伸びを続けてきた。二〇一八年は、夏場に相次いだ自然災害の影響によりマイナスに転じた月もあつたが、秋以降はプラス圏で推移している。

(2) 最近の特徴点

① 東アジアからの観光客の増加

訪日外国人旅行者の国籍をみると、東アジアが全体の七割強を占めている(図表2)。地域別構成比を五年前と比べると、東アジアが半分以上を占めることには変わりがないが、ここ数年

における中国からの観光客の大幅な増加により、そのシェアが一段と高まっている。ただし、企業等からは、地域によっては欧米豪や中東等からの来訪客が増加しているという指摘も聞かれている。

② 個人旅行の増加と訪問・宿泊地の広がり

近年はFIT(注1)と呼ばれる個人旅行者が増加している。旅行形態の変化をみると、個人旅行の比率は、政府による個人観光客向けのビザ緩和やオンラインの宿泊予約サイトなど個人々の多様な観光ニーズを実現できるインフラの整備が進んできたことなどもあって、この五年間で二〇%ポイント程度上昇し、約八割となっている(図表3)。

個人旅行へのシフトが進むも

とで、地方における延べ宿泊者数も増加している。地方宿泊のシェアは、この五年間で五%ポイント以上上昇しており、訪問・宿泊地に広がりが見られている(図表4)。

③ 「モノ消費」の落ち着きと「コト消費」の拡大

訪日外国人旅行者による旅行消費額は、旅行者数の伸びにつれて、ここ数年増加傾向にあるが、一人当たりの旅行消費額は、横ばい圏内で推移している(図表5)。一人当たり旅行消費額の変化をみると、最大の支出項目である「買物代」が、二〇一六年以降、マイナスに寄与している(図表6)。中国からの観光客による「爆買い」が終息し、「モノ消費」に落ち着きが見られる。

一方、飲食費・娯楽等サ一

ビス費については、足もとではプラスに寄与している。訪日ピーターの増加や後述する企業や自治体等における「コト消費」の拡大を受けた取り組みが訪日外国人旅行者のサ一ビス関連消費の増加につながっているとみられる。

3. インバウンド需要の

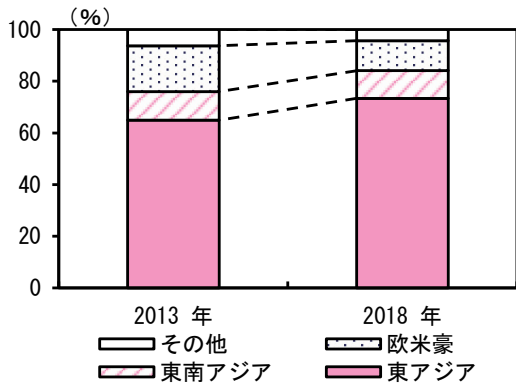
獲得に向けた企業や自治体等の取り組み

(1) 基本スタンス

わが国では、インバウンドを含む観光の振興を「成長戦略と地方創生の大きな柱」と位置付け、「観光先進国」の実現を目指している。そうしたもとで、二〇二〇年の訪日外

(注1) FITとは Foreign Independent Tour の頭文字の略。Free Individual(Independent) Traveler とあつて。

図表 2 訪日外国人旅行者の地域別・国籍別構成比等



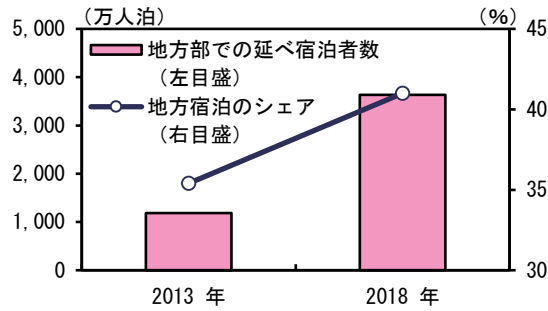
		構成比	訪日外国人旅行者数		
			2018年	2013年	2018年
1	中国	26.9	131	838	6.4倍
2	韓国	24.2	246	754	3.1倍
3	台湾	15.3	221	476	2.2倍
4	香港	7.1	75	221	3.0倍
5	米国	4.9	80	153	1.9倍

(注) 1. 2018年は暫定値。

2. 東アジアは、韓国、中国、台湾、香港。東南アジアは、タイ、シンガポール、マレーシア、インドネシア、フィリピン、ベトナム。欧米豪は、豪州、米国、カナダ、英国、フランス、ドイツ、イタリア、ロシア、スペイン。その他は、それ以外の国・地域。

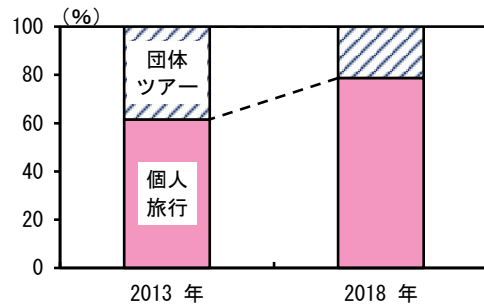
(出所) 日本政府観光局 (J N T O)

図表 4 地方部での延べ宿泊者数



(注) 地方部は、三大都市圏 (東京、神奈川、千葉、埼玉、愛知、大阪、京都、兵庫) 以外。以下同じ。

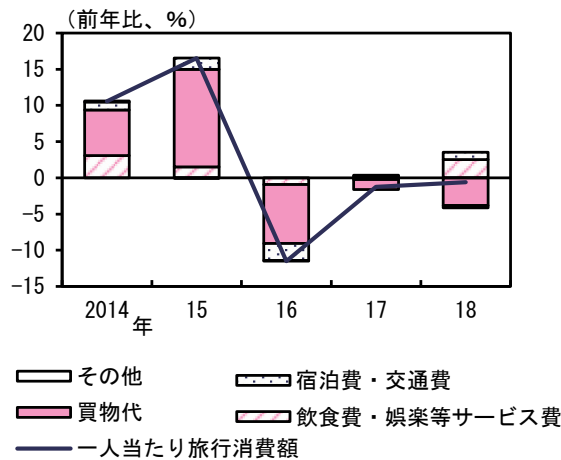
図表 3 旅行形態の構成比



(注) 観光・レジャー目的の訪日外国人の回答。

(出所) 観光庁

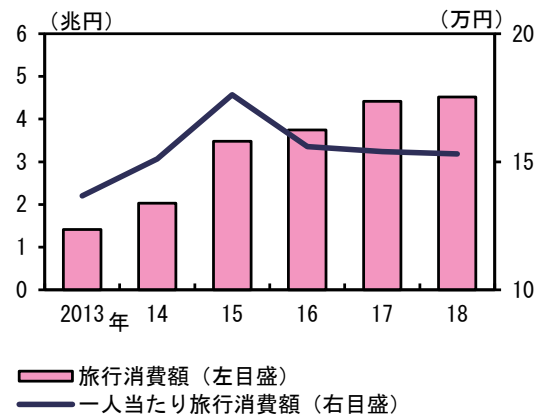
図表 6 一人当たり旅行消費額の変化



(注) 2018年から調査手法等が変更されたため、2017年までの旅行消費額や一人当たり旅行消費額の数値と単純比較ができない点には留意が必要。

(出所) 観光庁

図表 5 旅行消費額の推移



国人旅行者数四〇〇万人等の具体的な数値目標を設定し、国を挙げて誘客や消費喚起に取り組んでいる(図表7)。

企業や自治体等でも、そうした政府の施策に呼応するかたちでインバウンド需要を積極的に獲得していくとのスタンスが大勢である。特に地方では、急速に進行する高齢化や人口減少に対する危機感が強く、地域活性化の視点からインバウンド需要を積極的に取り込んでいくとする声が多く聞かれた。

一方、一部ではあるが、需要変動の大きさへの不安感や、外国語人材の不足、日本人の客離れに対する懸念などから、インバウンド需要の取り込みに慎重な先もみられた。

(2) 最近の取り組みの特徴点

① インバウンド客を受け入れ

環境整備の進捗

訪日外国人旅行者が快適に観光を満喫できる環境を整えるため、多言語対応や外国人スタッフの採用、Wi-Fi環境の整備、キャッシュレス対応など様々な取り組みがみられている。最近では、行政等による支援や音声翻訳技術をはじめとするテクノロジの普及により、中小・零細企業も含めて環境整備が進捗しているとの声が多かった。

こうした取り組みにより、客単価の上昇や免税販売額の増加など実際に成果が上がっているとの声が多かった。また、訪日外国人旅行者を対象としたアンケート調査でも改善がみられている(図表8)。

受入環境整備の一環として、関連業界からは積極的な設備投資を実施しているとの声が多

聞かれた。特に宿泊業では、異業種からの参入を含めて、ホテルや旅館等の新規開業や既存施設の改修といった動きがみられている。

ここ五年間で外国人延べ宿泊者数は大幅に増加しており、三大都市圏だけでなく地方部も含めて、インバウンド需要は宿泊業における設備投資の増加に相応に寄与していると考えられる(図表9)。

② スマホアプリやSNSの活用強化、デジタルマーケティングの導入

観光業界では、インターネットの利用拡大に伴い、これまでも外国語対応ホームページの整備やPR動画の配信などデジタル広告を利用した情報発信を進めてきた。最近では、旅行先でのスマホの利用

が増加していることを受けて、アプリの活用・開発を強化する動きがみられる。また、個人旅行が増加する中、海外のインフルエンサーを起用しSNS等で情報発信を強化する動きもみられる。

さらに、最近では、行政機関等が主導するかたちで、デジタル広告の活用から一歩進化した取り組みを行っている先もある。具体的には、スマホのGPSデータやクレジットカードの決済情報、SNS上での口コミ情報などのビッグデータを活用してインバウンド需要の動向を分析する「デジタルマーケティング」の方法を導入する動きがみられる。

こうした動きはまだ緒に就いたばかりではあるが、今後活用が進めばターゲットの明確化やプロモーション結果の

図表7 インバウンド関連における政府の目標値

	2018年	2020年目標	2030年目標
訪日外国人旅行者数	3,119万人	4,000万人	6,000万人
訪日外国人旅行消費額	4.5兆円	8兆円	15兆円
地方部での外国人延べ宿泊者数	3,636万人泊	7,000万人泊	1億3,000万人泊
外国人リピーター数	1,938万人	2,400万人	3,600万人

(出所) 観光庁

図表8 訪日外国人旅行者の「旅行中に困ったこと」(主な項目)

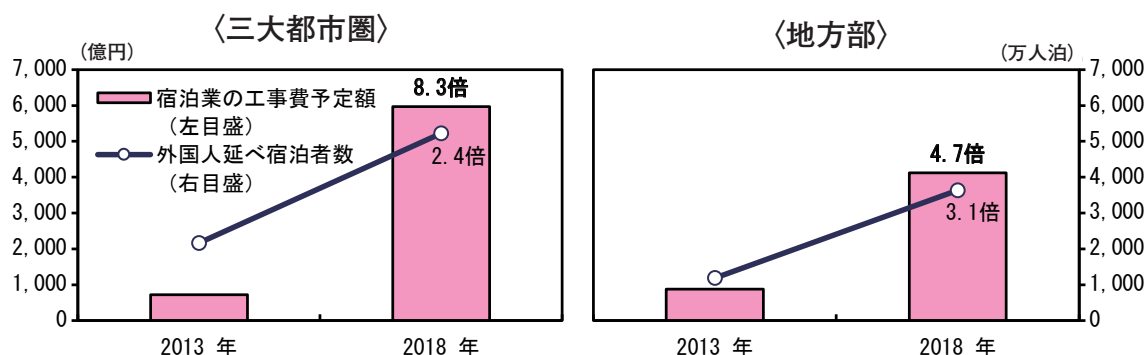
(複数選択、%、%P)

	2016年度	2018年度	
	(A)	(B)	B-A
施設等のスタッフとのコミュニケーションがとれない	32.9	20.6	▲12.3
無料公衆無線LAN環境	28.7	18.7	▲10.0
公共交通の利用	18.4	16.6	▲1.8
多言語表示の少なさ・わかりにくさ(観光案内板・地図等)	23.6	16.4	▲7.2
クレジット/デビットカードの利用	13.6	10.0	▲3.6
鉄道の割引きっぷ	10.6	7.2	▲3.4
両替	16.8	6.5	▲10.3
困ったことはなかった	30.1	36.6	+6.5

(注) 回答件数は、2016年度5,332件、2018年度4,037件。

(出所) 観光庁

図表9 宿泊業の工事費予定額と外国人延べ宿泊者数



(出所) 国土交通省、観光庁

③「コト消費」の拡大を受けた
 取り組みの積極化
 いわゆる「コト消費」については、中国からの観光客による「爆買い」の終息以降、様々な取り組みが行われてきている。とりわけ地方では、「モノ消費」における都市部の優位性が揺るがない中で、「コト消費」の取り込みに対する意識は高い。今回の調査でも、増加する訪日リピーターや個人旅行者の消費を喚起するために、それぞれの地域が持つ観光資源の磨き上げや医療ツーリズムといったテーマ別観光の企画など、多種多様な取り組みがみられている。

数値化、計画進捗の可視化を通じてPDCAサイクルの実効性が高まり、観光産業の生産性向上につながっていくことが期待される。

また、「コト消費」の拡大に向けた取り組みの中では、地方を中心に懸案となっている耕作放棄地や空き家、閉鎖施設などの不稼働資産を有効活用する取り組みもみられた。

4. インバウンド需要を地域活性化につなげる うえでの課題

インバウンド需要の獲得に関する課題については、インフラ整備の遅れや人材・データ不足など、企業や自治体等によって様々な声が聞かれている。そうした中、インバウンド需要を地域活性化につなげるうえでの課題について、「連携」、「分散」、「共生」という三つのキーワードで整理すると、以下のとおり。

① 連携

訪日外国人旅行者の誘客や消費喚起を行っていくうえでは、地域全体として様々な主体の連携が不可欠との指摘が多い。そうした中で、長年の競争関係や関係者間の意識のズレから、必ずしも十分な連携がとれていない、あるいは地域の稼ぐ力を高めていくうえで、関係者間で一層の連携を進めていく余地は相応にあるとの声が一部から聞かれている。

この点、政府では、日本版DMO (Destination Management /Marketing Organization) の登録制度を設けており、観光庁が定めた登録要件を満たした法人が登録されている。観光地域づくりの舵取り役として、地域の多様な関係者との連携や観光資源の活用に向け

て、日本版DMOがその役割を適切に果たしていくことが期待されている。

② 分散

訪日外国人旅行者数については今後も増加が見込まれる中で、二〇三〇年の目標が実現すれば現在の倍近い人数を受け入れることになる。前記2.(2)の特徴点で整理したとおり、近年はゴールデンルート(注2)での観光に偏った状態は緩和されつつあるが、先行きを見据えると、ゴールデンルートからそれ以外の地方へ、さらに地方の中でもより広範な地域への分散を一層進めていく必要があるとの指摘が聞かれている。

地方への一層の分散を図るうえで、地方空港へのLCC等の就航促進に加え、空港や鉄道駅から観光地までの移動手段で

ある「二次交通」の整備がカギとなる。この点、路線バスなどの公共交通機関を拡充する場合、財源や採算性等が問題になることから、解決は容易ではないとの指摘が聞かれている。もともと、最近ではMaas(注3)や自動運転の実証実験が行われるなど、進化するテクノロジーを活用して課題の解決につなげていこうとする動きが一部で見られている。

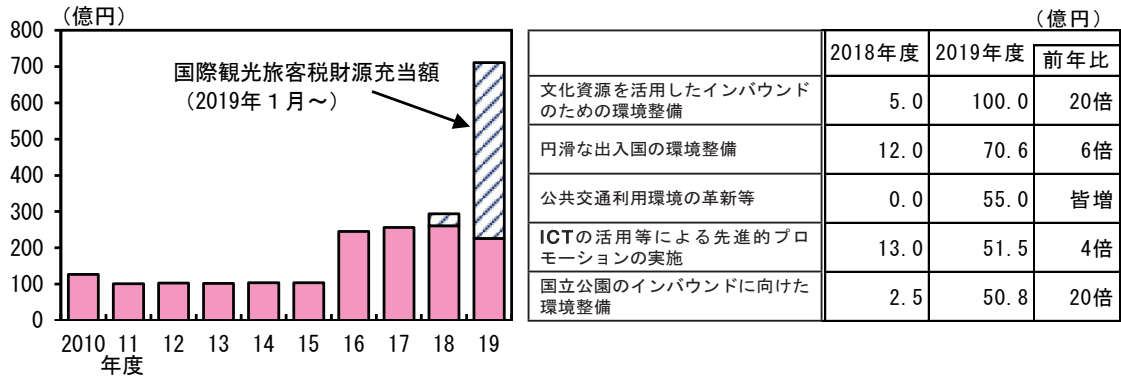
③ 共生

企業等の中には、インバウン

(注2) ゴールデンルートとは、東京、箱根、富士山、名古屋、京都、大阪などを巡る広域の観光周遊ルート。初めて日本を訪れるインバウンド客にとって主要な観光都市を周遊できるという人気がある。

(注3) Maas (Mobility as a Service) は、運営主体を問わず、情報通信技術を活用することにより自家用車以外の全ての交通手段による移動を一つのサービスとして捉え、シームレスにつなぐ新たな「移動」の概念。クラウド対応を含めて定義する場合もある。

図表 10 観光庁関係の予算



(注) 予算額は当初予算（復興枠を含む）。右図は前年度予算対比の増加額上位5施策を表示。
(出所) 観光庁

ド需要の獲得を意識しつつも、国内観光客や住民との共生の面で不安を訴える先も相応にみられる。一部の観光地では、ゴミの散乱や混雑・渋滞など、いわゆる「オーバーツーリズム」と呼ばれる問題が発生しているとの指摘も聞かれる。

観光による地域経済の持続的な発展のためには、住民や環境に対する負荷を抑えながら経済効果を高めていく必要がある。一部の地域では、課題解決のために規制や税の導入を検討する動きもみられる。税の導入を巡っ

ては、需要面への影響など慎重な検討を行う必要があるとの声も聞かれるが、そうした対応が観光資源の「質」を維持・向上させ、観光地の持続可能性を高めていくことにつながるかが注目される。

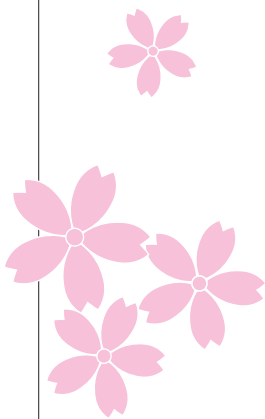
5. おわりに

インバウンドによる観光振興から地域活性化へ

先行きのインバウンド需要については、二〇一九年のラグビーW杯や二〇二〇年の東京オリンピック・パラリンピック、さらには二〇二五年の大阪・関西万博もあって、当面は増加傾向が続くとみられる。受入環境の整備についても、企業等の自主的な努力に加え、行政における財源整備に伴う各種補助の充実

化や、音声翻訳技術や自動運転、デジタルマーケティングなど進化するテクノロジーの普及・活用などにより、着実に進捗していくと思われる（図表10）。こうした点からも、わが国全体が「観光先進国」の実現に向けて着実に歩を進めていくと考えられる。

今回の調査では、実際に地域活性化につながった明るい動きが指摘されている。地域にとって観光は、地域活性化につながる成長戦略の柱の一つである。様々なレベルでの連携や地方への分散、住民や環境との共生を実現しつつ、インバウンドを起點とした地域活性化の動きがさらに広がっていくか、今後も注意深くみていきたい。



福島支店は開設一二〇周年を迎えました

▼福島支店は、七月十五日に開設一二〇周年を迎えました。



東北で最初、全国では七番目の店舗（本店を除く）として、明治三十二年（一八九九）七月に福島出張所が開設され、明治四十四年（一九一一）六月に支店に昇格しました。

▼福島出張所が、全国的に見ても比較的早い時期に開設されたのは、当時、福島が重要輸出品であった生糸や米穀の集散地で、東北の物流と金融の中心で



パネル展に展示した出張所、旧店舗などの写真

あったためと言われています。福島支店の旧店舗は、辰野金吾博士（日銀本店本館や東京駅丸の内駅舎等を設計）らが設計した福島市を代表する明治洋風建築でしたが、老朽化等を受け、

昭和五十五年（一九八〇）に現店舗に建て替えられました。▼開設一二〇周年を迎え、地元の方に支店の歴史を知っていただくため、出張所や旧店舗当時の写真、旧店舗の模型、支店周辺の旧市街地図等を展示した「記念パネル展」を支店ロビーで開催しました。多くの方にご来場いただいたこのパネル展の模様は、福島支店HPの開設一二〇周年を記念した特設ページに掲載予定です。



旧店舗の模型（株式会社福島まちづくりセンターより借用）

▼東日本大震災および原発事故から八年余りを経て、福島県の復興は着実に進んでいます。福島支店は、震災当時を含め、決済システムの維持や現金供給等を通じて県内の経済活動を支えてきました。今後も地域とともに歩みを重ね、その一層の発展に貢献してまいります。

金融市場調節事務のペーパーレス化に取り組んでいます

▼金融市場局市場調節課では、二〇一九年四月の金融政策決定会合で決定された「強力な金融緩和の継続に資する諸措置」の一環として、「国債補完供給」事務のペーパーレス化に取り組んでいます。

▼現在日銀が行っている金融政策（注1）のために、当課が行う国債の買い入れといった金融市場調節事務（オペレーション）は、年間一〇〇〇回を超えます。特に、日銀が保有している



ペーパーレス化初日、順調に進捗してホッと一息

国債を、一時的かつ補完的に市場参加者に貸し付ける「国債補完供給」の利用が大きく増えています（注2）。この国債補完供給事務を行うにあたり、これまで金融機関と日銀とのやりとりはファクシミリを通じて書面で行われていたため、利用先・日銀の双方にとって、負担の大きさが課題となっていました。

▼そこで、今般、「市場オンライン」を利用した電子ベースの事務に移行することで、利用先・日銀双方の負担軽減、および利便性の向上を図りました。

▼今後も、円滑な金融市場調節のため、RPA（注3）などの新しい技術を活用しつつ、他の市

場調節事務についてもペーパーレス化を一段と推進していきたいと思います。

(注1)「長短金利操作付き量的・質的金融緩和」のこと。詳細は日銀HP「教えて！にちぎん」をご参照ください。

(注2)二〇一八年度に行った国債補完供給の回数は、全てのおペレシヨンのうち最多の年間三六二回にのぼり、申請銘柄数は二三五銘柄となりました。

(注3) Robotic Process Automationの略。パソコンに組み込まれたソフトウェア型のロボットにより定型の単純な業務を自動化するテクノロジーを指します。

「SDGs／ESG金融に関するワークショップ」および「第2回ガバナンス・ワークショップ」を開催

▼金融機構局金融高度化センターは、六月十一日に「SDGs／ESG金融に関するワークショップ」を開催しました。世界的にSDGsやESG（注）を踏まえた金融の動きが広がるなか、わが国金融機関がこれにどう向き合っていくかを探るため、先行して対応する金融機関や専門家から、



具体的な取り組み事例等が紹介されました。議論を通じ、「SDGs対応は金融機関の本来の役割と親和的で、何か特別なことが求められるわけではない」との見方が共有されました。

(注) SDGs (Sustainable Development Goals)：持続可能な開発目標とは、二〇三〇年までに、貧困や飢餓、エネルギー、気候変動、平和的社会などの諸目標を達成するための国際連合が主導する活動。ESGとは、環境 (Environment)、社会 (Social)、企業統治 (Governance) の頭文字を取ったもの。

▼また、七月三日には、「第2回ガバナンス・ワークショップ」



を開催し、「ガバナンス改革と内部監査の高度化―経営監査の実践と社外取締役の役割



SDGs／ESG金融に関するワークショップの様相



第2回ガバナンス・ワークショップの様相 (撮影：野瀬 勝一)

」をテーマに、講演や議論を行いました。経営層を含む実務家や専門家、当局から、「経営に資する監査」について示唆に富む意見が披露されました。

▼ワークショップにおける講演資料等は日銀HPに掲載していますので、ぜひご覧ください。

本館見学を部分再開しました

▼本店本館（国指定重要文化財、一八九六年竣工）の見学を二〇一九年八月から部分的に再開しました。本館の中庭を一般

見学（要事前予約）のご案内しています。



▼二〇二〇年春頃には本館見学を全面再開し、中庭に加え、本館の建物内をご案内する予定です。地下金庫や旧営業場（ロビー）の中にお入りいただけるようにするほか、本館の建物内で写真撮影する機会を新たに設ける方向で検討しています。

▼建物内の展示としては、日本人建築家が手掛けた最初の国家的近代建築である本館の建物の魅力やその歴史に関する内容の充実を図ることを考えています。また、世界最初といわれる銀行券自動鑑査機（日銀に還流



本店本館（重要文化財）

編集後記

■私は昭和40年生まれなので、社会人になるまでのほとんどは昭和の時代でした。なぜ突然昭和？と思われるかもしれませんが、今回ご紹介したいくつかの話題は、私にとってまさに昭和を象徴するものでした。大空小学校初代校長の木村様から、障がいを持つ子どもそうでない子ども一緒に学ぶインクルーシブ教育についてお話を伺いましたが、自分の小学校時代を思い返し、今更ながら多くの気づきや反省がありました。映画評論家の佐藤様と原田審議委員の対談では、私も学生時代に映画をよく観ていて、自分の感想と専門家の評論の違いに戸惑いつつも、その度に視野が広がっていったことを思い出しました。作家の阿刀田様のエッセイを拝読し、昭和の時代は資産運用にあまり知恵を絞る必要もなかったなあ、などと振り返りました。令和の時代が始まって約5カ月になりますが、将来の夢や成長期待にあふれ、そして平和に向けて世界が動いていた、私が青春を過ごした昭和のような時代になって欲しいものです。(中川)

※本誌は、全国の日本銀行本支店および貨幣博物館、旧小樽支店金融資料館等でお配りしています。個人の方の定期購読、郵送はお取り扱いしておりませんのでご了承ください。なお、既刊号全文をPDFファイル形式で日本銀行ホームページ上に掲載していますのでご利用ください。
(https://www.boj.or.jp/announcements/koho_nichigin/index.htm/)

※本誌に掲載している内容は、必ずしも日本銀行の見解を反映しているものではありません。日本銀行の政策・業務運営に関する公式見解等については、日本銀行ホームページ(<https://www.boj.or.jp/>)をご覧ください。

にちぎん 2019年秋号
編集・発行人 中川 忍
発行 日本銀行情報サービス局
〒103-8660
東京都中央区日本橋本石町2-1-1
☎03-3277-2405



デザイン 株式会社市川事務所
印刷 株式会社アイネット
©日本銀行情報サービス局 禁無断転載

「日銀夏休み子ども特別見学会二〇一九」を開催

▼日本銀行本店では、夏休み期

▼見学会ご希望の方は、本店見学会予約サイトからお申込みください。見学会希望日の九〇日前から七日前まで、予約することができます。

してきた銀行券の真偽・枚数・汚損度を点検する機械)等を新たに展示する方向で検討しています。

▼見学会では、本店見学会やお札に関する体験学習などのプログラムにご参加いただきました。また、中学生を対象に「金融政策を決めるのは、君だ!」と題した模擬金融政策決定会合を実施しました。グループに分かれて架空の経済ニュースをもとに、景気・物価の動向とそれを



金融政策について議論する様子

踏まえた金融政策について議論し、最後には実際の金融政策決定会合と同様に、議長が政策を提案、メンバーの多数決で決定しました。

▼毎回好評をいただいております見学会の次回の開催は、来年の春休み期間中を予定しています。皆さまのお待ちしております。





from London

イギリスの底力—— 日本文化受容の「広がり」と「深さ」



ロンドン中心部を流れるテムズ川に架かる
タワーブリッジ

ある日の職場での昼食時、各自で思い思いのランチを購入して集まったところ、私以外の同僚全員がスシ、カツカレーといった日本食で、日本人の私一人がフィッシュ・アンド・チップスだったことに、全員が笑ってしまいました。日本食の人気は年々高まり、ヘルシー志向の人向けにスシ、ボリューム重視の人向けにカツカレーなどをイギリス人の嗜好に合わせ^{しこう}て提供するチェーン店がロンドン市内だけでも100店舗以上あります。味が「ブリティッシュ」な点を惜しむ声も在英日本人の中にはありますが、日本食はイギリスの物価水準を考えればお手頃な価格で、現地に根付いて見事に英国文化の一部となっています。

このような日本食人気^{かながきるぶん}が日本文化受容の「広がり」を示すものだとすれば、「深さ」を示しているのが、2019年5月～8月まで大英博物館で開催されていた日本のマンガの企画展でしょう。企画展の冒頭のインタビュー映像では、手塚治虫^{てつかおさむ}が鳥獣戯画^{ちようじゆうぎが}（注1）にはじまる日本文化におけるマンガの伝統について



今回のマンガ展に展示されていた「新富座妖怪引幕」^{しんふざやかいびきまく}。明治十三年（一八八〇）に仮名垣魯文の友人である河鍋曉斎^{かまきりあきさき}が描いた縦四メートル、横は一メートル以上にもおよぶ大作。

語っていました。また、別の展示コーナーでは、仮名垣魯文^{かながきるぶん}（注2）から現代の作家まで幅広く紹介されていました。このほか、コスプレやマンガなどの同人誌の即売会についても取り上げるなど、日本のマンガをさまざまな角度から、深く掘り下げた内容となっていました。この企画展に合わせて、大英博物館の学芸員による研究成果をまとめた350ページ以上もある本も出版されており、付け焼き刃的なのではないことが分かりました。また、大英博物館を舞台にしたマンガのグッズも販売するなど、この企画展は柔軟さとしたたかさを併せ持つイギリスらしさが存分に感じられるものとなっていました。このように外国という鏡に映る自国の姿から、その国の価値観を知るのも面白いものです。

（イングランド銀行、ロンドン）

*本コーナーは海外で働く日本銀行職員または日本銀行からの出向者が執筆しています。

（注1）鳥獣戯画：平安後期～鎌倉初期の時代に描かれた京都市高山寺所蔵の絵巻。サル・ウサギ・カエルなどの動物が擬人化して描かれ、日本最古の漫画といわれる。

（注2）仮名垣魯文：江戸末期～明治初期の戯作者・新聞記者。風刺のきいた戯文に長じた。『仮名読新聞』『魯文珍報』を創刊。著書に『安愚楽鍋』『西洋道中膝栗毛』など。



大英博物館正面にはマンガ展「Manga」の垂れ幕



にちぎん